

文化人類学を生きる

結 城 史 隆¹

1. フィールドワークの現場

文化人類学は極めてユニークな学問である。「文化人類学を学ぶと、もうそれ以前の自分には戻れなくなる。自分が変わり、世界がまるで違って見えるようになる。」と松村圭一郎は『文化人類学の思考法』（2019）の冒頭に書いている。「自分が変わる」というのは、フィールドワークを通して、「他者の姿は、まず、自分たちとの差異として現れる。そして、その他者の存在は同時に、それとは異なる私たちの姿を浮かびあがらせる」（同書 p.5）からである。

彼はまた、『うしろめたさの文化人類学』（2017）をエチオピアのフィールドワークをもとに書いている。最近でも、斗鬼正一は『頭が良くなる文化人類学』（2014）、田中雅一は『誘惑する文化人類学』（2018）、鈴木裕之は『恋する文化人類学者』（2015）、岩野邦康は『ダメになる人類学』（2020）、奥野克巳は『ありがとうもごめんなさいもいらぬ森の民と暮らして人類学者が考えたこと』（2018）という本を著している。

他の学問分野のことはよく知らないが、『頭が良くなる政治学』とか『恋する経済学者』というような本はあるのであろうか。上記の表題を見て、文化人類学の特異性、異端性、衝撃性を感じられる人もいられるかも知れ

¹白鷗大学教育学部教授
e-mail : yukifumi1950@outlook.jp

ない。

大学3年生の時にこの文化人類学を専攻し、このたびの定年退職の時を迎えて50年になる。振り返ってみると、文化人類学者というのは「文化人類学を研究する」こともさりながら、「文化人類学を生きる」ということではないかと思うようになってきた。それは文化人類学者が避けては通れない、「フィールドワーク」が原点となり、学問を考えつくりあげていくことによるものではないかと思う。

文化人類学の基本的考え方の一つに「文化相対主義」がある。世界にはさまざまな文化があるが、それぞれの文化に価値の優劣高低ははく、差異だけがあるという考え方である。各文化はそれぞれ独自の世界や認識の仕方、外界の区分方法をもっており、その認識には根本的必然性がない、つまり恣意的であるということである。私たち自身も自分の文化に捉われており、他にも多様な認識や区分があることに気づかなくなっている。そこで異なる文化の世界に「フィールドワーク」に行って、他者や自己、そして人間の文化や社会について思索するのである。

1980年の10月、ジプニー（乗り合いジープ）に乗って林道を進み、さらに山道をほぼ1時間歩いて夕暮れ近くに、ブキドノン⁽¹⁾と呼ばれる人々が住むマプロという村に着いた。⁽²⁾そこはフィリピンでルソン島について大きいミンダナオ島の中央部の森林地帯にある、人口200人ほどの集落である。案内の青年が一つの家を連れていき、私はセブアノ語⁽³⁾で書かれた州都マライバライの市長と観光局長からもらった書類を、家から出てきた中年の男性にわたした。それには、日本人である私がしばらくその村に滞在し、その文化や社会構造を調査したいと書かれているはずであった。（私はセブアノ語が読めない。）

その家の男性はそれを読むと、高床式の家屋の入り口近くのスペースを示し、私は荷物をそこに置いて、寝袋の中で眠った。翌朝、目がさめると、若者や子どもたちがペランダにたくさん集まっていた。昨日訪れた訳の分からない外国人を見に来たのである。彼らは大声で話を交わし笑い合

う。しかし、それは彼ら固有のビヌキッド語。まったく意味がわからない。私は友好的で無害な人間であることを示すために、ただただ微笑んでいるだけであった。「あの村にはタガログ語と英語が少しわかる若い女性がいて、君のことを助けてくれるわよ」と言った州都の観光協局長の言葉は裏切られた。あてにしていた女性は村から出ていった後だったのである。⁽⁴⁾

目の前に人はいるのにコミュニケーションがまったくとれない。それは過酷な状況である。そんな状態にいると2～3日で精神がおかしくなる。⁽⁵⁾私は自分の準備の甘さを呪い、いったん州都であるマライバライの町に戻った。そして、本屋に行き英語で書かれたセブアノ語の入門書を買って村に帰った。

その本を見ると、英語で“What is this?”は、セブアノ語で“Unsa ini?”と出てくる。それで今度はセブアノ語のわかる若者に“Unsa ini?”はビヌキッド語では何というか聞くと“Inu hai?”と答えてくれる。ビヌキッド語はセブアノ語と同じオーストロネシア語に属すると思われるので、“Inu?”は「何?」、 “hai”は「これ」の意味であると推測できる。それからは、身の回りにあるものを指して“Inu hai?”と聞いて、モノの名前をノートに書いていく。さらに、「あれは誰?」とか「父親」「母親」「兄弟・姉妹」などの単語を覚えて、通りがかる人の名前や人間関係などを知っていくのである。

つまり、「何を研究するか」「どのように研究するか」と言う前に、言葉がわからない、電気や水道やガスも何もない、知り合いもないところで、「どのように生活していくか」「どのように村の人とつきあっていくか」が問題になってくる。フィールドワークというのは、「調査研究しながら生活していく」「生活しながら調査研究していく」ということである。これが「文化人類学を生きる」という意味である。

何もなくても時間だけはたくさんある。私はひたすら言葉を覚え、ひたすら人々の関係を見つめ、ひたすら彼らの後について畑や森に入っていた。文化人類学でいう「参与観察」を実践していくのである。

しばらく住みついていると、マプロ村がとても居心地のいい場所であることがわかってきた。低緯度地帯の海拔が高いところは、年間を通して気温が安定している。マプロ村は夜を含めて摂氏20度以下になることはないし、昼間でも摂氏28度を超えることがなかった。雨の多い時期と乾期はあるが、一年中Tシャツと短パンで過ごせるのは快適である。

集落は1メートル幅くらいの小川に沿って高床式の家が並んで建てられている。調査時に人の住んでいる家が36軒、その他に10軒ほどの空き家がある。人口は約200人。人の出入りが激しいので、正確な数はわからない。集落の周囲は焼畑耕作の畑跡が広がり、放棄されてからの期間によって二次林の成長が異なるので、緑色のパッチワークのようになっている。さらに奥には薄暗い大森林が続いている。

住民の朝は早い。東の空に山のシルエットが浮かぶころには、薪が燃やされ、朝食の準備がはじまる。家々から煙がたちのぼり、人々の声が外にもれてくる。朝食が終わると、水汲みや家畜の世話、畑仕事や森の中での活動に出かけていく。⁽⁶⁾

夕暮れ近くなると家に戻ってきた人々は、家の前の木陰で談笑したり、夕食のために粉をついたり、家畜の世話をして時を過ごす。夜が急速に訪れ蛍が飛びかう頃になると、家の中では空き缶に布の芯をさしただけの灯油ランプのしたで、にぎやかな夕餉がはじまる。そして、いつの間にか子どもたちのはしゃぎ声が消え、深い暗闇と静寂があたり一面をおおいつくしていく。

このようなゆったりとした日々が毎日つづくのである。私には翌日の予定もなければ、やらなければいけないような義務や仕事もない。ただ、彼らといっしょに住み、彼らの後についていって観察し、メモをとり、時には説明を聞いたりするだけである。そのシンプルで穏やかな生活がだんだん心地よくなる。

しかし、一方で精神的にまいってしまうこともある。それはプライバシーがまったくなかったからである。私は彼らの生活様式や食事内容、道

具、行動、人間関係などすべてが興味深く、いろいろ尋ねたりする。しかし、彼らも外国人の私の存在や所持物に好奇心をもち、特に若者たちは朝早くから入れかわり立かわり私の様子を見に来る。私がメモを調査ノートに整理しているだけでも、興味深そうに眺めている。私は常に見られる存在となっていた。

また、カメラやテープレコーダーは彼らにとっては珍しく、写真を撮ってくれ、録音した語りや歌を聞かせてくれとせがむ人もいる。持参したフィルムや電池は数に限りがあるので気が気ではないが、いつも世話になっている彼らの望みを無下に断ることもできない。

さらに村内の人間関係の築きかたにも困難がともなう。私は村全体を知るために、村人全員とおなじように付き合える「いい人」でしようとした。しかし、私は透明人間として客観的に存在しているわけではない。しばらくすると私の「とりまき」のような若者たちと、それを遠巻きにしている若者たちがいることに気がついた。前者は毎日顔を出し、いろいろ情報をくれるし、森を歩くときはカメラバッグを持ってくれ、私のタバコを勝手に吸っている。後者は集落内で会っても深い話はしない。どんな社会においても、人間関係をすべて平等にすることは不可能であるが、コミュニティ研究としては釈然としないものが残る。

あるとき、一軒の家の前に人が集まり、大きな声をあげて騒いでいた。見に行くと人の輪の真中に一人の青年がしゃがみ、指を押さえている。どうやら森での作業中に誤って山刀で指の先を切り落としてしまったらしい。私はすぐに寄留先の家に戻って、救急袋から消毒用のアルコールと脱脂綿、包帯を持ち出し、青年のところに戻って手当をした。調査地で自分がいつ怪我をしたり病気になるかわからないので、調査に入る前に、簡単な応急措置を習い、いくつかのクスリを持ってきておいたが役にたった。⁽⁷⁾

この出来事で、村人たちは私がクスリをもっていること、無料で手当をしてくれることを知った。もちろん彼らはクスリのことを知っている

が、それは町に行ってお金を出して買わなければならないものであることも知っている。普段は熱がでたり下痢をすると、森に入り薬草を採ってきて、煎じて飲んだり、燃やしてその煙を吸ったりしていた。ところが、子どもが怪我をして膿が出ているところに、抗生物質の入った軟膏を塗るとすぐに治る。高熱を出している人にアスピリンをあげるとたちまち熱が下がる。クスリに接していない彼らには、劇的に効果が出るのである。

そのうち、怪我人や病人が私のところに連れてこられるようになった。果実を採ろうとして木から落ちて脛が痛い痛いと言っている女の子。骨折しているかどうかはわからないが、とりあえずキンカン⁽⁸⁾を塗ったあと包帯で添木をしてあげた。へびに咬まれたとって朦朧としている青年。周囲の人に聞くと「運がよければだいじょうぶだし、悪ければ死ぬ」と気軽に言う。「何かクスリをつけてくれ」と言うので、ここでもキンカンを傷口に塗る。よく朝、彼が元気な顔を見せたときには心からホッとしたものである。

そのうち、集落内の人があるだけでなく、遠くの村から歩いてクスリをもらいに来る人もでてきた。⁽⁹⁾彼らの相手をするには、家族のことや生活のことなどのいろいろな情報収集にはとてもよい機会ではあったが、次々と対応するには疲れ果てた。寝袋にもぐって、狸寝入りをしたこともあった。そもそも、私には医療の心得などはまったくない。もってきているクスリも自分用のもので、いわゆる赤チンやオキシドール、消毒用アルコール、風邪薬、正露丸、ビタミン剤、抗生物質のカプセル、そしてキンカンくらいである。クスリをどうしても欲しがると人には、ビタミン剤をあげたが、プラシーボ効果はあったようである。そして、クスリが底をついたことにして、この騒動も次第におさまっていった。

このクスリの一件は、調査に入った私自身が、現地の人々の意識に変化を起こさせたり、欲望を喚起させたりしてしまったということを示している。前述したように、調査者が無味乾燥な透明人間であることは不可能で、周囲にながしかのインパクトを与えてしまうことも認識しなければ

ならない。⁽¹⁰⁾

マプロ村に滞在してしばらくたってからであるが、町で知り合った日本人の3名の青年海外協力隊が私の集落を訪ねてきた。かれらの専門はそれぞれ稲作、野菜栽培、獣医である。ブキドノンには野菜栽培の文化はなかったが、2軒ほど町で種を買ってきて家庭菜園的なもので豆やピーマンをつくっている家があった。彼らは野菜栽培隊員にいろいろ質問する。また、村の人々にとってスイギュウは大きな財産である。1軒だけスイギュウを飼っていた家があったが、獣医隊員に飼い方や病気について聞いていた。その他にも、ブタを飼っている家は少なくない。

村人たちの青年海外協力隊に対する真剣な表情を見ていると、文化人類学者は無力感にとらわれる。彼らに直接的に役に立つことは何にも教えることができない。「親族の分析の仕方を勉強してきました。」などと言っても、誰も喜ばないであろう。

このようなエピソードは、フィールドワークをやった文化人類学者であれば（あるいは他の分野の研究者も）誰でも経験していることである。平穏な日常の中で起きるさまざまな出来事や彼らとのつきあい・やりとりを通して、私は彼らを理解し、彼らの社会や文化を把握しようと努めた。

そして1年と数ヶ月。彼らのコミュニティの中で、家族や男女のありかた、人々の関係、秩序維持や紛争の解決、儀礼や精霊のこと、モノの生産や消費・分配・・・本当に多くのものを学ばせてもらった。ミンダナオ島の小さな村で得たことは、その後の考え方・生き方に大きな影響を与えることになった。

2. 文化人類学への道

私は1970年に大学に入学し、2年後の1972年に教養学科文化人類学学科に進学した。50年前は、文化人類学を学べる大学は限られていたし、極めてマイナーな学問として学生たちの間に知名度もなかった。文化人類学専攻に進学する学生は毎年多くても4～6名と言われていたが、私の時は

どうゆう訳か同級生が9名もいた。戦後の高度成長期の真ただ中で、この「変てこ」な学問に惹きつけられた学生が9名もいたのである。

文化人類学に惹きつけられる動機としてよく言われるのが、「書齋の学問ではなく、フィールドの学問」「異文化を理解するための知識の宝庫」「文化摩擦により生まれる問題を解決する方法や手段」「西欧社会の価値観を相対化する姿勢」「文化の位階序列ではなく、平等への導く学問」「自分の生活している社会とは違った場所への憧れ」「多様な人間の存在形態を学ぶことから、社会の根源とは何かを問い、人間の可能性について考える」、すなわち「社会と人間の根源を問う文化人類学」などが挙げられる。(太田：2005 p.2) 私たち9名はこの文化人類学の多重的な魅力に惹きつけられながら、各自各様に思いをもって学ぶことになった。

その9名の同級生の一人である清水展(九州大学-京都大学)は、「アメリカ海軍第7艦隊の母港である横須賀基地から2キロほどしか離れていない、引き揚げ者の寮のひとつ」に生を受けたことが、その後の人生に大きな影響を与えたと書いている。(清水：2016 p.393) 彼は小学校2年生の時に私立のミッション・スクールに転校した。「貧困と暴力で荒んだ引揚者寮と、横浜の良家や小金持ちの子女が集まる学校という、まったく異なるふたつの世界のあいだを」(同書：p.383)を往復して高校生まで通った。そして、「生々しい性欲を持った米兵たちの圧倒的な存在感が周囲の世界を支配した」状況と、「行儀のよいアメリカ、つまりキリスト教徒と大衆文化(音楽、映画、テレビドラマ、ファッション)にどっぷりと浸り洗脳されて過ごした。」(同書：p.394)

そのために「文化人類学に進学したのは、日本の近代化の過程とその結末の今現在を考えなおすため、アメリカ大衆文化とプロテスタント教育で洗脳された自分を自由にするため」であると言う。(同書：p.395)

これは第11回日本文化人類学会賞の記念論文として書かれた「巻き込まれ、応答してゆく人類学」に書かれたものである。彼の生い立ちからフィールドワークでの振る舞い、民族誌の創生、そして若い後輩の文化人

類学者に対する叱咤激励がひしひしと伝わってくる。

学生時代には清水とやはり同級生で畏友である稲村哲也（愛知県立大学－放送大学）との3人は「文化人類学教室の3バカ」⁽¹¹⁾と呼ばれ、渋谷界限でよく飲んだ。旅行にいっしょに行ったし、麻雀もやったし、女子学生と盛り上がったこともある。何を話したかはもちろん覚えていないが、いっしょに「青春」をしていたことは確かである。しかし、50年がたち、清水の自分史的叙述を読むと、同じ時代に神奈川と東京というすぐ近くで生まれ育っても、幼い頃に見ていた風景はまったく異なっている。そのような子ども時代の体験が、その後の研究や人生に関わるものかはよくわからないが、それぞれが異なったやりかたで「文化人類学を生きて」きた。

清水に習って、私たちの時代の一つの側面として個人史からはじめよう。私はいわゆる団塊の世代（1947年～1949年生まれ）の翌年1950年に国立町になる直前の谷保村で生まれた。国立は三浦友和・山口百恵夫妻が住み着いて以来「オシャレ」な街の代表となったが、当時は畑の広がる農村であった。父は福島県会津の片田舎に生まれ育ち、アジア太平洋戦争でトラック諸島まで出撃させられ、かろうじて生き残って帰国した。戦後、会津の故郷には仕事がないので東京に出てきて仕事を探し、落ち着くと見合いして母と結婚した。そして、私が生まれた。つまり、私は典型的な「田舎系二世の東京育ち」である。国立の家は平屋のバラックのような都営住宅で、井戸で水を汲み、銭湯の帰りが寒かったことをぼんやりと覚えている（気がしている。）

4歳の時に、公団住宅の抽選が当たって世田谷の井伊直弼の墓があることで有名な豪徳寺に引っ越した。豪徳寺のお寺のすぐ横に開発された団地で、4階建ての長方形の建物が4棟、ロの字に中庭を囲み、中庭には芝生と砂場があるシャレたものだった。部屋は4畳半と6畳の間だけだったが、内風呂と水洗便所がいっしょになった浴室があり、急にモダンな生活になったような気がした。

小学校は子どもであふれ、1年生のときは「朝番」と「昼番」が交互に

あり、一つの教室を二つのクラスで使うのはあたりまえであった。2年生の時に、少し離れた畑の真ん中に6教室だけの分校ができ、1～3年生の半分の児童がそちらに移された。⁽¹²⁾つまり、私は世田谷区立城山小学校の第2期生になる。

当時の小学生の男子はどんな厳冬期でも半ズボンで、腿の皮膚はガラガラ、手足の指先はしもやけで腫れていた。「ナガウマ」「カンケリ」「キチクスイライ」などの男の子系遊びの他に、子どもが自由に使える「ドラえもん的空き地」で三角ベースをやったり、寺の木に登ったり、防空壕としてつくられた洞穴で遊んだ。団地の子どもは地方から出てきた親の子どもがほとんどで、父親の職業はサラリーマンや公務員が多かった。この「地方系二世」は世田谷が農村から住宅地に急激に変貌していく過程で生まれた新しいグループで、地元の商店街の子どもたちと対抗できる勢力に次第に拡大していった。⁽¹³⁾

小学校低学年の頃のヒーローは相撲の栃若両横綱やプロレスの力道山であり、2年生の時に長嶋茂雄が巨人軍に入り、翌年には皇太子であった平成天皇のご成婚行進があった。そして、5年生の時に、父がついにテレビを買った。知り合いの家で好きな番組を見せてもらっていたのが、ついに我が家でも見られるようになったのである。⁽¹⁴⁾時代は1960年代に入っており、60年には国会前で死者がでるような安保闘争があったが、多くの人々の生活は平穏な中で高度成長経済の恩恵の一端を享受していったのである。

1966年、高校入学の時に、父が会社でそれなりの地位を得たのか、中野区鷲宮の二階建て庭づき一軒家の社宅に移った。生まれてはじめて「自分の部屋」が与えられ、そこから自転車です立高校に通った。部活は迷ったすえに硬式野球部に入った。中学卒業まで草野球しかやったことがなかったのが不安はあったが、朝授業前には仲間と素振りをし、退屈な授業の時は右手に筆記用具ではなくボールを握って手首を鍛えていた。2年生の後半からはレギュラーになり、ショートでキャプテンという望外のポジ

ションが与えられた。すでにいわゆる「日大闘争」や「東大闘争」ははじまっていたが、スポーツ少年たちは、懸命にボールを追いかけていた。

1968年7月の夏の甲子園大会東京都予選3回戦で敗退すると、目標を失った私たちは、ギターを習い始めたり、本格的に受験勉強をやるうといきこんでいた。しかし、学内はだんだんとゲトゲしくなっていく。同級生の一部が学外の学生集会や学生デモに参加し、佐藤栄作政権の欺瞞性や大学の腐敗性を学内でアジるようになったからである。穏やかであったクラスに未熟な意見が対立し、教室内に怒号が飛ぶこともあった。⁽¹⁵⁾

年が明けると、受験生たちは志望校や志望学部を本気で決めなければならなくなる。私は数学が好きだったというだけで理学部を受けることにした。そして、1月18日、突然テレビには東大安田講堂とその目の前に対峙する巨大な放水車と大勢の機動隊が映し出された。屋上やテラスから火炎瓶を投げるヘルメットをかぶる大学生たち、そこに圧力をあげた大量の水を放射する機動隊。その攻防は翌日まで続き、学生たちは抵抗空しく排除された。そしてその翌日の20日に東京大学の入試中止が発表された。

受験生にとって大学入試は目の前に立ちほだかる揺るぎないものであり、それが突然なくなることはあり得ないことであった。当時は東大だけでなく、全国の多くの大学が学生に占拠されたり、ロックアウトされていた。茫然自失のまま受験の準備をした。幸い入試中止は東大だけで、他の大学は入試をすることになったが、多くの大学構内は占拠学生がいて入試合場にはできない。1969年3月3日の大雪の日、機動隊に守られた予備校の教室で入学試験を受けた。そして落ちた。

4月になると浪人した高校の仲間とお茶の水の予備校に通った。予備校の目の前では、「安保反対！闘争勝利！」と叫び大きな波となったデモ隊と機動隊がぶつかる。新宿駅西口の広場には大勢の若者があふれかえり、私たちもリーダーのギターに合わせて岡林信康や高石ともやの反体制的歌を唄った。いわゆるフォークゲリラである。しかし、そこにも機動隊が現われ催涙ガスを打ち、「西口広場」は一夜にして「西口通路」と名称が変更

され、誰も立ち止まれなくなった。

予備校は午前中に授業が終わるので、午後は読書会をやったり、覚えたての麻雀をやったりしていた。トロツキー、キルケゴール、吉本隆明など流行りの本も読みはじめたが、ほとんど理解できなかった。それでも、仲間の共有ノートに、読書感想や自作詩や稚拙な評論を書いては回覧して楽しんでた。そんな中で、次第に理科系に進学することに疑問を持ちはじめた。もっと人間や社会について学びたくなり、10月に文科・社会系の学部を受験することに決めた。そして、翌3月には、運よく大学に合格できたのである。

私が大学に入学した1970年は、日本の戦後を考える上で、ある意味で一つの大きなエポックであった。6月23日に自動延長を迎える日米安全保障条約に反対する勢力は、強化された機動隊や内部分裂によって、前年ほどの勢いはなかった。6月23日に渋谷や新宿をうろついてみたが、拍子ぬけするほど静かに安保条約は自動延長された。大学構内ではその後も立て看板、アジ演説、対立するセクトの間の石投げ罵倒は続いたが、学生を中心とした政治の季節の終わりを感じさせるものであった。

それに代わって日本国民を興奮させたのは、3月15日から大阪の千里丘陵で開催された大阪万博である。敗戦で何もない状態から四半世紀でつくりあげた、高度経済成長のシンボルである。当時の最先端の技術とサービスを駆使し、太陽の塔をはじめとする高い芸術性を発揮し、新しい未来を感じさせた。9月13日までの183日間で6400万人以上が入場した。同時にケンタッキー・フライド・チキンが登場し、翌年には銀座にマクドナルドの1号店が開店した。

11月25日には、作家の三島由紀夫が市ヶ谷の陸上自衛隊の駐屯地（現防衛省）に入り、総監を拘束したうえで、バルコニーから自衛隊員に決起を促した後に、割腹自殺をするという衝撃的な事件が起きた。

また、同年4月24日に「過疎地域対策緊急措置法」が制定された。これは、過疎地域を特別支援するはじめての法律である。その後、10年ごと

に改定され、現在の「過疎地域自立促進措置法」（2000年制定）につながっている。日本の産業構造の変化によって引き起こされた農山漁村の過疎化は50年たっても未だ解決されていない。

このように私たちが大学に入学した1970年は、学生の政治の季節が終焉するとともに、高度経済成長の象徴である大阪万博が開催され、アメリカのファストフードが上陸しその後の日本人の食生活を変えるきっかけとなり、日本の美を追求しアメリカからの自主独立を促した三島が自死し、その裏で、農山漁村から若者がいなくなるという大きな転換期であった。

話を個人的な話に戻そう。大学の2年生の後半になると、3年からの専門課程をどの学科やコースで学ぶかを決めなければならない。「人間」や「社会」を学びたかったが、各コースのカリキュラムを見ても漠然としていて定まらない。家には電気洗濯機、電気冷蔵庫が置かれ物質的には豊かになっていた。電話も普及し、生活は格段に便利で快適になっていった。しかし、高度経済成長を浮かれる気持ちもなかった。大阪万博には興味もなかったし、実際に行かなかった。日々流される生活になにかしっくりくるものがなく、ふわふわした気持ちで軽薄に過ごしていた。そのようなときに思い出した本が二冊あった。

一つは京大探検部出身で朝日新聞記者の本多勝一が書いた『ニューギニア高地人』（本多：1981）である。中学生の時に、朝日新聞の夕刊に連載されていた。私はその記事を毎日わくわくして読み、切り抜いてスクラップブックに貼っていた。内容は1964年に実施した、インドネシアのイリアンジャヤにおける調査報告である。ニューギニア山岳地帯の奥深い村に入り、当時、まだ石器を使っていた種族といっしょに生活してきた。「暗色の顔が白い歯をみせて笑うとき、笑顔であることには違いないが、私たちの不安をいっそうつらさせる」（本多：1981 p.17）出会いから、男性の好みでつくりあげるペニスケース、容器のない社会での煮炊き、親族を亡くしたときに悲しみを和らげるために指先を切り落とす女性たち、戦争や美人コンテストなど、私の知らない世界が目の前に広がった。

もう一つは後に私の恩師となる中根千枝の『未開の顔・文明の顔』(1959)である。1953年から1957年にかけて行ったインドのアッサム、シッキム、カルカッタ(コルカタ)の調査やヨーロッパ滞在における「私の訪れた人々の姿、行動、人間関係、考え方など」を記述したものであり、「それは「海の向こうのこと」ではなく、日本の私たち自身につながり、また私たちの問題である」ことを忘れてはいけないと言う。(中根：1959 p.6)

アッサムでの調査においては、ガイドとポーターを連れて女性一人でジャングルの中に入って行く。大変な行程だが彼女は次のように書く。「ジャングルで私はよく思った。私のこの最小限の物質しかない小さなテントを、王侯貴族の宮殿に誰かが交換してくれようとしても、私はこの愛すべきテントをとるだろう、と。それほど、ジャングルの生活は私にとって楽しいものだった。」(同書 p.37)一方、ロンドンやストックホルムの豊かで快適な生活をしていると、ついついインドの喧騒・雑踏・独特の匂いを懐かしく思い出す。「(生活)水準が高くなれば、高くなるほど欲求が強くなるから、精神生活は貧しくなる恐れさえないだろうか。本当に貧乏ということは、その欲求と所得の度合いが大きいほど、自覚されてくるものようだ。」(同書 p.158)と痛烈に文明批判をしている。それも60年以上も前にである。

一人で奥地に行くフィールドワークについて問われると「ただいくのよ。通訳とガイド、ポーターを連れてね。何でもないことよ。ただ行けばいいの。」(同書 p.156)とあっけらかんと答えている。

これらの言葉に魅惑されて、私は教養学科文化人類学分科を専攻することに決めた。

前出の清水は「文化人類学に進学したのは、日本の近代化の過程とその結末の今現在を考えなおすため、アメリカ大衆文化とプロテスタント教育で洗脳された自分を自由にするため」と述べていた。私にはこのような高邁な理念や思いは持ち合わせていなかった。ただ、多忙で軽薄で毎日お祭り騒ぎをしているような東京の喧騒から抜け出し、「未開の地」での出会

いや体験を夢見ていただけかもしれない。

そして、文化人類学専攻に入ってすぐに読んだマリノフスキーの「仕事のためにふさわしい環境に身をおくべきである。つまり、できるだけ、白人といっしょに住まず、原住民のどまんなかで暮らすことである。」(マリノフスキー：1967) や、マーガレット・ミードの「私は、思春期の少女のいる家庭をもっとも念入りに調査した。また、私は長老たちの集まりに耳を傾けるよりも、子供たちの遊びに入っていくことが多かった。彼らの言葉を話し、彼らと同じ物を食べ、裸足のままで小石の敷き詰めた土間にあぐらをかいてすわった。」(ミード：1976) の文章に胸を躍らせた。いつか自分も「異郷」でフィールドワークをやってみたいと思ったものである。

3. ブキドノンの社会

ブキドノンの人々が住むマプロ村には1年と数ヶ月滞在した。そこで生活していると、単に調査をするだけでなく調査者である私自身の感覚や意識が変わってくる。例えば、集落に住んでいる人は全員を知っている。たまに知らない人が来訪していても、「だれだれのイトコ」とか「あの家の親戚」とかすぐに教えてくれる。一方、買い出しに町にでかけ市場に行くと、買い物客も売り子も知らない顔ばかりなので急に不安になり落ち着かなくなる。(渋谷の雑踏を一人で歩いていても何も感じなかったのに・・・)そして、村に戻ると安心して落ち着いた気持ちになれる。「共同体とは知った人の集まり」「関連、関心を持ちあう人々の集まり」であるという単純なことが実感として理解できるようになる。

町に行くには集落から林道まで1時間弱歩いて下りて、ジブニー(乗り合いジープ)に乗らなければならない。しかし、そのジブニーが何時にくるかわからない。朝早く起きて林道のわきで待っていると、ジブニーがすぐに来ることもあれば、2時間、3時間たっても来ないこともある。結局、まったく来ないで、村に引き返したこともあった。最初の頃、なぜそのように不定期になっているのかを村人に聞いた。答えは簡単であった。

プランギ川上流にあるジブニーの始発場所にはそれなりの大きな集落があり、だいたいの出発時間はある。しかし、客がある程度集まらないと、ジブニーの運転手は出発させないとのことであった。道の脇で待つことも、このような時間の流れにもすぐに慣れてしまう。⁽¹⁶⁾日本のように、乗客がいらないのに定刻になるとバスを動かし、結局、大赤字になって廃線にするバス会社とどちらが賢いのかわからなくなる。

マプロ村には正式の学校はなかった。村一番のインテリであるマドリッド氏が、暇な時に子どもたちを集めてセブアノ語の本を読んだり、簡単な算数を教えたりしていた。⁽¹⁷⁾それ以外の時間は、子どもたちは村の中を走り回ったり、木に登って果実をとったり、はしゃいだりしている。男の子たちは5～6歳になると父親や兄についていって焼畑の伐採や森の中での採集、狩り用の犬の飼育を手伝うようになる。女の子は3歳くらいになるとヤシの葉っぱの切れ端をおもちゃとして与えられ、5～6歳になるとヤシの葉を使ったカゴづくりを自分でやりたがる。水汲みや精米は年長の女の子の仕事である。このようにして子どもたちは、彼らの環境の中で生きるすべを習得していく。

このようなところに長くいると、学校のある村にいくと、かえって違和感を持ってしまう。学校のある村には、昼間、畑や道端に子どもたちがいない。子どもたちは、大きな建物に閉じ込められて、大声で本を読まさせられたり、算数の練習をさせられている。私には子どもたちがいつも傍らにいる学校のない村のほうがが楽しく見えてしまう。しかし、「学校がないこと」が楽しいわけではない。「学校に行かなくても生きていける」村の方が、外部から来た私には幸せそうに見えるのである。

子どもは誰でも学校に行かなければならないという普通教育は、産業革命に関連して、たかだか300年前に誕生した制度にしか過ぎない。しかし、近代国家の成立と市場経済の浸透は、学校に行かない・学校に行けない子どもたちに大きな負担を強いるようになった。学校に行かないと知識がつかないわけではない。自足的なブキドノン社会の人々も精巧で豊かな

知識をたくさんもっている。⁽¹⁸⁾しかし、市場経済社会においてお金を稼ぐには、学校で習う知識が必要となる。⁽¹⁹⁾「学校」そのものが重要なわけではない。貨幣経済が浸透するという状況において、学校普通教育が必要不可欠なものになってきたのである。マプロ村も私がいた40年前の当時のままであり続けることはありえない。しかし、あの時の感覚が、その後、私が教育や学校のことを考えるうえで、重大な原点となっているのは事実である。

ブキドノンの社会は「分かち合い」、すなわち分配の平等性が徹底している。例えば、狩猟で得られた野ブタは、解体され5～10センチの角切りにされる。そして当日に集落にいる家族の数を正確に数え、それに見合うだけの竹串を用意する。その竹串一本一本に肉、脂身、皮付き、骨付きなどを不平等にならないように差し込み、各家に手渡される。狩猟に参加したかどうかは関係ない。その時、集落にいれば分配されるのである。

10月になると焼畑には陸稲がたわわに実り、収穫が共同労働で行われる。この時に、手伝いに行った人は誰でも（私のような外国人でも）持って行ったカゴに擦り切り一杯の粉をもらうことができる。しかし、カゴの大きさは決まっておらず、大きいカゴを持って行っても小さいカゴを持って行ってもよい。この慣習も彼らの分配の平等性が基盤になっている。というのも、彼らはそれぞれの家庭の事情をよく知っている。子どもがたくさんいて食いぶちの多い人、畑が害虫やネズミの被害にあった人などは大きいカゴを持っていく。夫婦二人だけの人は小さいカゴを持っていく。自分の畑の収穫の3分の1くらいは手伝いに来た人に持っていかれるが、足りなければ他の人の畑を手伝いに行けばよい。結果的に、村の全員が同じようにお米を食べられるようになるのである。⁽²⁰⁾逆に、モノを多く持っているのに周囲の人に与えないのはガバ（罰）に値し、病気になったり事故に出会ったりすると言う。（結城：1985c pp.141-143）

このような収穫物や資源の平等化は「貧困の共有」とか「モラル・エコノミー」と表現され、東南アジアの農村部ではよく見られることである。

共同体がメンバーの一人ひとりを包摂し、少なくとも家族全員が生きていける保障を与えるものとして機能している。

マプロに住み着いた当初は彼らの言葉の理解が不十分であり、もっぱら若者や子どもたちと接触し、言葉を教わっていた。その中で興味深かったのは、「なぞなぞ遊び」で、彼らの関心事、身近なものが上手に表現されていた。例えば、「毛を焼かれてから、槍で刺されるブタはなあに」「最初は槍で、あとで楯になるものなあに」という具合である。前者の答えは「焼畑」であり、後者の答えは「バナナの葉」である。30近くのなぞなぞを集めたが、なぞなぞは子どもの遊びというだけでなく、ブキドノンの人々の文化のエートス、機知、ゆたかな感性、自然に対する見方を表していた。(結城：1982)

一方、一見平穏に見えるマプロの村であるが、まったく波風が立たないわけではない。些細な喧嘩や焼畑跡地の利用法をめぐる対立もある。そのような争いを調停しておさめるのは、ダトゥと呼ばれる社会的リーダーである。彼は精霊を慰撫し、悪霊や外敵から人々を守り、共同体内の争いを鎮めて秩序を守る。

私が滞在中に起きた最大の事件は、集落の若者と夫をなくした寡婦の間の密通関係が表沙汰になった時である。10代半ばの男の子がいる寡婦は、若者と結婚したかったが、若者にはその気がなかったことがわかり、思いを親族に吐露したのがはじまりであった。

最も激怒したのは、その寡婦のためにかつて婚資⁽²¹⁾を払い、いまだに彼女に対する権利を主張できる立場にある亡夫の親族たちであった。彼らは歩いて二日ほどある居住地から大挙押し寄せ、若者は彼女と結婚して婚資を払うべきだと要求した。しかし、当事者の若者は森の中に逃げて行方をくらませてしまった。そこで亡夫の親族と若者の親族の間で争いが起きた。そして、ダトゥは伝統的な裁判(仲裁)であるパグフーサイを開いた。

当日は朝から緊張した空気が張りつめ、人々はつきつきと集会場に集まった。ダトゥが経緯を述べたあと、左右に分かれて座った両当事者はそ

れぞれ言い分を主張した。ダトゥは進行役となり、聞き役となり、行き過ぎた発言をたしなめた。若者の父親は既に酒に酔っ払い、寡婦の母親は恥ずかしさのあまり泣き出し、亡夫の親族の中には興奮して演技口調になり山刀に手をかけ脅した。仲裁そのものが一つのドラマとなっていた。

亡夫側は賠償としてこの地域で最も高価なスイギュウ一頭を要求し、若者側の親族はその要求を拒絶した。亡夫側は「集落の人にどんな事故が起きても知らないぞ」と脅し文句を残して帰っていった。

当日は折り合いがつかず不調に終わったが、そこからダトゥが己の能力を発揮する場となる。連日のように当事者双方に親しい有力者を交渉役として送り、協議し両者が納得できる妥協案をさぐった。その結果、2週間後にはスイギュウの代わりに、ブター頭、ニワトリ一羽、それに現金150ペソの賠償で和解した。ダトゥは人々を集め、二度と密通をしないこと、当事者の親族どおしは婚姻関係を結ぶことの禁止を宣言し、その後には罪を洗い清めるための儀礼が行われ、一件落着となった。

このようにブキドノンの社会的リーダーは、強制力を持っているわけではなく、「力ではなく知恵によって」人々を納得させ、紛争を解決していかなければならない。そのためには、慣習法に精通し、状況を的確に判断し、人々の心理を適切に理解する能力が必要となってくる。

また、ダトゥの知恵の源泉は、トゥマノッドと呼ばれる特別の精霊によるものであり、儀礼的機會を通して、人々と超自然の世界を結び付ける役割を話している。(結城：1985d pp.119-122)

「知恵の象徴」がダトゥであるとする、「力の象徴」として対抗するものとしてバガニがいる。バガニは外敵が攻めてきたときには先頭にたって戦い、コミュニティを守る役割を担っている。狩猟の際も獲物めがけて恐れず進み、たとえ毒蛇がでてきても立ち向かうことができると言われている。「勇者」あるいは「戦士」と呼びえるような人である。

ダトゥの「知恵」の源泉が特別な精霊であったように、バガニの「力」の源泉は、人々が恐れているブーサオと呼ばれる邪悪な精霊である。ブー

サオは森の奥の古木やヤドリギに棲み、暗がりです突然人前に現れ、人々に病気や怪我、災いをもたらす。自然界に存在する超自然的な害意であり、力と危険を象徴となっている。このブーサオが憑くことによって、バガニは他の人とは異なる能力を發揮できるのである。

バガニは外部の邪悪な敵に対しては力強い保護者となるが、一方、力を持っているということは内部の秩序維持にとっては、非常に危険な存在、暴力的な存在となる。バガニに憑いたブーサオが怒ると、挑発、叫び声、暴力、好戦的な態度を引き起こすと考えられている。バガニが引き起こした狂気（アモック）、理由の分からない暴力の例は、文献にもいくつか記述されている。（結城：1985d p.124-125）

共同体が存続していくためには、力やエネルギーが必要不可欠である。しかし、それが内部で暴走すると共同体存在の危機になる。「知恵者」としてのダトゥは、潜在的危険をはらむ「勇者」のバガニを秩序の枠組みの中に組み込み、その「力」を管理してゆかなければならない（と、思われている。）

ある日、A氏の家で儀礼があると若者たちが呼びにきた。A氏は口数が少なく穏やかな人物であったが、狩猟の際には突進してくる野ブタに対して身を挺して槍を突き刺しに行く。彼はバガニと見られているようであった。

A氏の家横に儀礼台が作られ、ブタが縛られ固定されていた。ダトゥが祈祷をあげ、邪悪なものや穢れを浄化するためにショウガを噛み砕き口から吐きかける。そしてA氏が普段とは異なる恐ろしい形相で槍を持って現れた。儀礼台に近づくと、ブタの心臓めがけて槍を一気に刺し通し、顔を伏せてあふれる血を飲み下す。持ちあげた顔は、目がらんらんと光り、口のまわりは血がべっとりついている。私は何が起きたのかまったくわからず、カメラのシャッターを押していた。

後から彼らからこのタラッグブーサオと呼ばれる儀礼について説明を受けた。「①バガニにはブーサオが憑いている。②したがって、バガニは力

と勇気を持ち外敵を倒す。③ところがブーサオは空腹になると怒りだす。④するとバガニが暴れて危険。⑤そこでバガニに好物のブタの血を食べさせる。⑥するとブーサオは満足して邪意をなくす。⑦それで、私たちは安全になる。」と、いうものであった。

ここで、「儀礼は観念や信仰など目に見えないものを行為によって表象する」「儀礼は日常的な生活から切り離され、特別な時間、空間、装置において執行される。」「儀礼には変身がつきものである」というような「儀礼理論」の基本に則った分析は可能である。「社会の維持には暴力的、危険な「力」が必要不可欠であるとともに、それをコントロールしていくことを表象化することも必要である」という事例とも言える。帰国後、この儀礼について論文も書いた。(結城：1985d pp.115-147)

しかし、現地にいるときから、何かしっくりしないものがあった。「あ～そうだったのか！」という体験をともなった深い理解に達していない不安があった。一つは言語の問題である。日常生活のビヌキッド語には困らなくなっていたが、精霊や悪霊や儀礼などの観念的で複雑な話を理解するには不十分であった。先ほどのタラッグブーサオ儀礼の説明に関しても、さまざまな矛盾する説明の中から私が理解できるように抽出して解釈してしまった恐れがある。

さらに、私には悪霊であるブーサオを見ることも感じることもできない。村人は新月の夜に森の中に行けば、ブーサオに会えると言う。ただし、大きな災難に会うことを覚悟しなければならないと付け加える。実際、一人で集落のはずれに行ってみた。風が揺らす木々の葉音は、不気味な怖さを感じさせる。森に続く真っ暗な道の先には「もののけ」が潜んでいるような気になる。岩田慶二がマレーシアの森林では、「夕方になるとすべての村びとは家に戻り、それと入れ違いに妖怪どもが森に出没することになる。」(岩田：1979 p.28)と言う。「東南アジアでは、概していうと、山地民族のカミは怖れのカミ」(岩田：同書 p.29)であり、ブーサオも同様の霊かもしれない。

ただし、幼いころからブーサオの恐ろしさを教えられ、夕暮れまで遊んでいるとブーサオに連れていかれると脅されて育った彼らが、タラッグブーサオの儀礼で見えているものは、私が見えていたものとは異なるはずである。目には見えない、言葉では説明できない、ただし、その実在は確実に感じているもの、そのようなものは、各文化に必ずある。柳田国男は日本のご先祖、祖霊に対して「この信仰の強みは、新たに誰からも説かれ教へられたものでは無く、小さい頃からの自然の体験として父母や祖父母と共にそれを感じて来た」（柳田：1945）」ものとしている。このように、自然の中で感じて来たものを、他文化の者が頭だけでなく心から理解するのは本当に難しい。⁽²²⁾

私が帰国した1980年代前半には、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』が注目を浴びていた。知識と支配の関係性を説いたこの書物は、文化人類学にとっても無縁ではなかった。「知識をもつということは、それを支配すること、・・・我々はそれを知っていると同時に、またそれがある意味で、我々が知っているごとくに、存在しているからである。」「東洋人は・・・支配を体現する枠組みのなかに封じ込められ、またそのような枠組みのもとで表象される存在なのである。」と指摘している。（サイード 板垣訳：1993（1978））

異文化の中でフィールドワークを行い、彼らを理解しようとし、知識を集積したうえで、「良質の民族誌」を書くことを目標としてきた文化人類学に揺らぎが生じる。

さらにジェームス・クリフォードとジョージ・マーカスが編集した『文化を書く』は、民族誌を書くことに関して大きなインパクトを与えた。「民族誌をフィクションであるという、経験主義者の怒りをかうだろう。しかし、最近のテキスト理論が使うこのフィクションという言葉は、「真実に対するもの」とか「偽り」といった単純な意味ではない。それは、文化的真実や歴史的な真実の部分性・・・を意味する。・・・排除とレトリックという強力な「嘘」によってはじめてすべての真実が構築されるのである。」

(クリフォード：1996 (1986)) と調査者の主観や対象との関係性抜き
の客観的な分析があり得ないことを示した。

「排除とレトリックという強力な「嘘」によってはじめてすべての真実
が構築される」という一文は衝撃的でインパクトを与えた。私個人的には
透明ガラスと曇りガラスがパッチワークのようにはめ込まれた窓からブキ
ドノンの社会を見ていたような気持ちがしていた。

1982年に帰国して博士課程を単位満期で中退したが、すぐに常勤の仕
事があるわけではない。非常勤講師としていくつかの大学で教え、予備校
でアルバイトをして糊口をしのいでいた。

1985年の3月も終わりに近づいた頃、恩師である中根千枝先生から突
然電話がかかってきた。そして、この電話が私の人生を大きく変えたので
ある。

4. ネパールへ

「ゆうきくん ネパールに行かない」と言うのが、中根先生の第一声で
あった。旧知の間柄であった在ネパール日本大使館の金子一夫大使が中根
先生を訪問され、専門調査員を探しているとのことであった。私はネパー
ルのことなどまったく知らないし、4月からの非常勤講師の契約も終わっ
ていた。「明日までに返事をちょうだい」と電話は切れた。この思いもし
なかつた提案に不安があったが、未知の国の文化と人々への興味が沸々と
わいてきた。4月から外務省で研修を受け、5月にはジャカランダの花が
紫色に咲きほこるカトマンズに降り立っていた。

「調査員」というので、いろいろフィールドワークができるのかと思っ
ていたが、大使館の勤務にはあまり自由はなかった。着任してすぐに前述
した稲村哲也がネパールのクンプ地方のシェルパの集落に調査に行くこと
になった。私も誘われたので出張届けを書記官に提出しようとする、
「来たばかりなのに出張に行きたいのか」とあきれられた。その時はなん
とか許可をもらったが、その後は大使館の仕事以外では勤務時間中はでき

るだけ館内にいるように参事官に言われた。

当時の在ネパール日本大使館には、日本人は大使、参事官、書記官3名、領事、電信官、派遣員、そして私の9名しかいなかった。調査員の仕事の大半は、彼らスタッフの手伝いであった。日ネ友好交流のためのジャパンデイには文化担当書記官とさまざまな催し物を企画して実施した。日本人が犯罪を犯して逮捕されると、領事とともに留置場に接見に行き、下着や食事の差し入れをし、さらに裁判までつきあった。水難事故で日本の若者が溺死したときには、現地の警察に飛んで行って、残った友人たちから事情聴取をした。国会議員の訪ネ視察団が来るときには館員一同が手分けをしてアテンドをする。テレビ番組の撮影隊がネパールに入るときは、機材の通関から現地情報の提供まで求められた。⁽²³⁾ 最も思い出に残っているのは、まだ皇太子であられた今上天皇が訪ネされたときである。この時は本当に忙しかった。⁽²⁴⁾

その他、財布をなくした、犬にかまれた、ネパールに学校をつくりたい、ネパール人に騙されてお金をとられた・・・と、いろいろな日本人が次々にくる。金子大使は興味深い日本人がくるとすぐに公邸の晩餐に招待し、そして酔っ払った。大使主催のゴルフコンペには無理やり出場させられ、日本人会総会の議長をやらされ、日本人麻雀大会の事務局長をやり・・・あっという間に2年間が過ぎた。

ネパール語の家庭教師をつけていたが、大使館内は日本語と英語ですべて仕事ができ、ネパール人の友人の大半はカトマンズを本拠地とするネワール民族であった。かれらはインドヨーロッパ語系に属するネパール語ではなく、チベットビルマ語系のネワール語を母語としている。したがって、ネパール語を聞く機会も話す機会も少なく、ほとんど上達しなかった。

その中で退職した元公務員であるクリシュナマン・マナダール氏が、私にネパールやネワールの文化を手ほどきしてくれた。ネワールの数々のお祭り、儀礼に私を連れて行って解説をしてくれた。彼はカトマンズ盆地の外輪山を越えた段々畑の中腹に彼は農家を借りていた。塩化ビニールの

ホースで水道をひいたり、子どもたちに勉強を教えるなど周囲の生活向上にとりくんでいた。そこにはたびたび訪問滞在させていただいた。また、彼はネワールの古い伝統的が残るキルティプールの街にも家を借りており、そこのテラスでいろいろな話を聞いた。

1987年から千葉県にできる新設の大学に就職する予定になっていたが、開学が1年遅れた。そこで、私は大使館勤務が終わっても1年間、ネパールに残ることにした。大使館時代は庭付き一戸建ての家が与えられていたが、もっと庶民的な地域、家屋に住みたかった。幸いカトマンズの隣接する古都パタンの王宮のすぐ近く、観光客に有名なゴールデン temple のすぐ隣に家を借りることができた。ネワールの古い街の様式、寺院や広場を囲むように4～5階建ての民家が壁を接して並ぶ、街並みの真ん中である。私は毎朝早く起きて、隣の寺院に参拝にいった。人々は朝食前に参拝に行くのでいつも混んでいるが、彼らのまねをして仏を拝み、巨大な金剛杵に額をつけてエネルギーをもらっていた。

私の家の裏から広場を二つ横切ったところに日本語学校があった。古い寺院のような建物の幅狭い階段を登ると、物置きのような教室が二つあった。各教室には裸電球が一つだけぶら下がっている、その薄暗い灯りの下で、若いネパール人が熱心に日本語を勉強をしていた。

1980年代は日本からのネパールへのODAが急激に増えている時期であり、多くの商社、建築会社、コンサルタントなどがカトマンズに支社を置き、ダムや道路、病院、飛行場などの建設に関与していた。日本人の観光客、バックパッカー、トレkkerも増加していた。その影響で日本語学習は一つのブームになっていた。カトマンズには国立トリブバン大学の言語学部日本語コースがあり、また、いくつかの有名な日本語学校があったが、パタンにはまだ大きな学校はなかった。私は頼まれてその塾のような学校で日本語を教えることになった。もちろん、私には日本語教育の資格も訓練もなかったが、生徒たちの熱心さに驚かされ、教えるに行くことが楽しみとなった。

ネパールの教育方法は、ヒンズー文化圏やイスラム文化圏の多くの国において見られたことであるが、思考よりも暗記に重点をおいていた。高校卒業の時に大学進学のために統一試験を受けるが、そこでも暗記量をためず問題が多い。したがって、大学生になっても初歩的数学が苦手な人が多かったが、逆に語学のような暗記が重要な科目にはとても強い。「明日までに漢字を十個覚えてきなさい。」というみんな競うように覚えてくる。

ある日、当時千葉県県の県会議員であった北角虎男夫妻が、我々の学校を視察に来られた。粗末な机とイスが並んだ薄暗い教室で熱心に勉強する生徒たちをご覧になられ、「これはひどい。なんとかしなければ。」と思われたようで、いっしょにNEPA(ネパール教育整備推進協会)を立ち上げた。北角先生は、地元千葉県の後援者、故郷新潟県の人々、旧制高校時代の仲間などに声をかけて募金をはじめられた。「ネパールの若者のために教育を！」というテーマは当時の人々の心をうち、1980年代末のバブル経済のまっただなかということもあって、驚くことに100万円近くの寄付金が集まった。

その資金をもとに、パタンの街の入り口近くに土地を買い、5階建ての立派な学校が建設された。このパタン日本語学校は、その後私がネパールで活動する拠点となった。

その出発の一つが、私が日本に帰国後、八千代国際大学に専任教員として就職すると、教え子1期生の女子2名を留学生として受け入れ半年間自宅に寄留させて大学に通わせたことである。彼女たちはもともと優秀でかなりのレベルの日本語を習得しているが、日本に来てからも熱心に勉強し、当時はあまりいなかったネパール人の評価を高いものとした。これをきっかけに、パタン日本語学校から毎年4～5名の優秀な学生を大学や日本語学校、専門学校に招聘することになった。学費はNEPAが負担し、アパートやアルバイトは北角先生が世話をした。私のアパートにはネパール人が集まり、夜遅く帰ると知らないネパール人がリビングで寝ていることも珍しくなかった。

アパートにネパール人が常に同居していると、ある種のフィールドワーク状況になる。彼らが日本社会にどのように適応していくか、日本人たちが彼らをどのように見ているかがよくわかる。⁽²⁵⁾ネパールにいた時には気づかなかったことも見えてきた。彼らの6～7割は民族的にいうとネワールであったが、インド系の顔つきをしたバフンやチェトリ、日本人にそっくりのチベット系のシェルパもいた。ネワールの中にもさまざまなカースト出身者がいる。彼らは同じ大学の先輩後輩として、いっしょに集まってネパール料理をつくり、食べたり飲んだりしている。

ある時、一人の上位カースト出身の女子学生がネパールに一時帰国することになった。同窓生の多くが両親や兄弟に手紙やお土産を持って行ってくれと彼女に頼んだ。彼女は喜んで引き受けたが、ネパールに着くと、「あの先輩の家にはカースト的にあがれない」ということを思い出すのである。日本にいる時は、何も感じずに普通に接していたのに、ネパールに入ると特定のカーストの家には行きづらいという気持ちになったことに、本人自身も戸惑ったと話してくれた。規範や習俗は絶対的な根拠はないが、ある特定の地域においては、強烈に人々の思考や感情を規制する。人間の意識や観念がうみだしたものが、逆に人間の認識を縛るというパラドックスがここにも見られた。

総計で40人ほどのネパールの若者を日本に招聘した。彼らは現在40歳代になり、日本に残って仕事を持ち生活しているものもいるが、その多くはネパール社会の中核で活躍している。⁽²⁶⁾2016年に妻と娘たちを連れて、ネパールを訪問したが、懇親会には彼らの配偶者や子どもたちを含めて総勢50人くらいが集まってくれた。会が盛り上がったことは言うまでもない。

5. 国際協力を考える

ネパールの研究は、山本紀夫先生（当時国立民族学博物館教授）のチームに入れていただいたことからその方向性が大きく変わっていく。まず、1991年に「ネパール・ヒマラヤにおける環境利用の民族学的研究—中央

アンデスとの比較一」という文部省の科学研究費による調査で、ネパール東部のカンチェンジュンガ山麓や中部山岳地帯のランタン谷などを、山本先生と稲村哲也(前出)と3人で3ヶ月近く歩いて調査を行った。そして、1994年から3年間にわたって「ネパール・ヒマラヤにおける草地・森林利用の動態に関する民族学的研究」という調査に参加した。これは、文化人類学だけでなく社会学、自然地理学、草地学、植物生態学など社会科学から自然科学までに至る研究者が12名参加する大プロジェクトであった。(山本・稲村：2000)

そして、このヒマラヤでの調査の中で、地域開発や国際協力について深く考えるようになった。そのきっかけとして、1990年のペルーの列車の中で見た一つの光景があった。(結城：1999)

ペルー研究の文化人類学者、女子留学生、出版編集者と私の日本人4名は、インカの遺跡マチュピチュを見学してクスコに戻るところであった。列車の中でロースト・チキンの昼飯を終えると、白人系の女性たちが食べ残しをかたづけにきた。そして、次の駅に停車すると何やら隣の車両が騒がしい。窓からのぞいてみると、その車両のまわりに子供たちが集まり大声をあげている。そして、先ほどの女性たちがその子供たちに向かって、われわれの食べ残しを窓から投げるように与えていたのである。

「犬に餌をあげてみたい！」と、いっしょに旅行していた女子留学生は泣き出してしまった。「そんなつもりで、残したんじゃないのに。」と、涙は止まらない。私も突然のできごとに、状況を理解するのに時間がかかった。ペルーに長いこと在住している文化人類学者は、「残飯でも捨ててしまうより、おなかをすかした子供たちにあげたほうがいいんじゃないかなあ。」とつぶやく。

食べ物を残した人、それを集めて与える人、それを必死にもらおうとする子どもたち、その光景を見つめる現地の人々・・・さまざまな感情、行動、視線が絡み合い交錯して奇異な空間をつくりあげていた。

私たちは列車が終点に着くまで、「援助」とか「国際協力」について語

り合った。先ほどの鮮烈なイメージが残っているだけに、もはやきれいごととは語れなかった。モノを与えらる関係性の中では、究極的には「自分は食わずに与える」「食べ残したものを与える」「一切与えない」という三つのパターンしかないのではないかと提起された。最初の「自分は食わずに与える」のは、よほど特殊な状況でないと出現しない。「一切与えない」というのでは「援助」にはならない。したがって、「援助」や「協力」における「残飯性」が激しく議論されたのであった。⁽²⁷⁾

話をネパールに戻そう。

1995年4月、私たちの調査の拠点があるヒマラヤ山中のジュンベシ村から歩いて20分ほどの木々に囲まれた広場は人であふれ、大騒ぎとなっていた。空から学校の寄宿舎が「飛んできた」からである。二段ベッドが入れられれば40人は寝泊りできる上質の白木を使った立派な宿舎が建てられていた。

この寄宿舎は地元学校からの要請にもとづいてエドモンド・ヒラリーが寄贈したものである。ヒラリーとは、1953年、世界最高峰エベレストの初登頂生還に成功し、イギリスではサーの称号をエリザベス女王から授けられた英雄である。彼は登頂に協力してくれたヒマラヤの民族シェルパに感謝し、その故郷であるソル・クンプ地方の生活の向上に精力を注ぐことになる。⁽²⁸⁾

彼の協力支援活動は1960年代に入って本格化するが、大きく分けて3つの分野に集中した。一つは環境と森林の保護であり、その成果はサガルマータ⁽²⁹⁾国立公園として実現した。二つ目は医療分野で、病院やヘルスポストの建設、医師の派遣や薬品の供給などを積極的におこなった。当時は一部の都市を除いてこのような施設はネパール全土で欠如しており、彼は先駆的な活動を行ったといえる。三つ目は学校の建設である。当初は小学校中心であったが、次第に高等学校まで設立されるようになり、遠隔地の生徒でも通えるように寄宿舎の建設が要望されたのである。「環境」「医療」「教育」というのは、現在でもネパールのNGO活動の三大分野であ

り、ヒラリー卿の視点の確かさ、先見性がうかがわれる。

しかし、1995年にジュンベシ村に建設された寄宿舎は特異なものであった。建築にネパールの建材はいっさい使われていないのである。スイス工科大学のイベントの一つとして企画され、スイスで木材を調達し、そこで加工して組み立てたものを分解し、はるばる輸送してきたのである。カルカッタ(コルカタ)までは海上を運び、そこからラクソール、カトマンドゥを経由してジリまで陸送し、さらにヘリコプターでジュンベシを含めて2つの村に空輸した。ヒラリーみずから40名のスイス人学生を連れて訪れ、運ばれた部品を組み立てて完成させた。盛大なオープニング・セレモニーが開かれ、スイスとシェルパの若者たちは交流をおおいに楽しんだという。そのときの写真は宿舎の壁にはられ、ヒラリー卿は常に人々の輪の中心にいた。

この寄宿舎はヒラリーの理念、理想をまさに体現し象徴したものであると言われる。「ネパールの木を一本も使っていない」というのは、環境保護と教育整備という彼の方針を目に見える形で実現した。そのうえスイス人の若者たちと現地の人々の間に、協力と交流の強い絆が築きあげられた。まさに理想的な協力援助と賞賛する人たちがいる。

一方、地元のシェルパの人々の中には批難したり憤慨している人も少なくない。わざわざスイスから材を運ぶことで、どれだけの金額がかかったか考えてみるというのである。海路、陸路、空路とつないできた膨大な輸送費、政府に払った税金や大勢の学生を連れてきた旅費、これらの膨大な経費と資金があれば、もっともっと村や地域のためになるプロジェクトがいくつもできたはずである。例えば、「ネパールの森林を守るというのであれば、小型水力発電を強化して薪に対する依存度を軽減したほうがよい。」「ネパールにも木材だけでなくガラスも取っ手もある。全部スイスからもってくる必要はないのではないか。」「ネパールでものを買えばネパールの経済の役にたつのに。」「自分たちが楽しむために企画したんじゃないの。」・・・

もちろん学校関係者や寄宿舎ができることでメリットのあると考えた人たちは大喜びである。ヒラリー御一行を大歓迎し心からもてなした。しかし、一方、この寄宿舎とは関係のない人々、あるいは、デメリットを受ける人たちは、不満や陰口をたたいていたのである。

私たちはヒラリーの善意、誠意、情熱を疑うものではない。彼は率直にシェルパの人々に感謝し、彼らの社会が向上することを希求して精力をつぎこみ、さまざまな活動を積み上げてきた。しかし、上記の寄宿舎寄贈の事例は、最初にあげたフィールドワークの状況と相似している。目の前に建てられた立派な寄宿舎を見ても、立場や思いによって、見えているものは異なっているのである。このことは、私たちに「国際協力」の本質を垣間見せてくれたような気がする。

一つは、現在の多くの「国際協力」は表面的にいっしょに力を合わせているように見えても、「してあげる側」と「してもらう側」との関係性の中に現象として現れてくるということである。そして、両者の理念、思惑、利益は往々にしてまったく異なっている。それぞれがそれぞれの思いを抱きながら、モノと出来事を中心にその関係性を保っているのである。

もう一つは、地元の人々の間にも関係性によって、多種多様な反応がでてくるということである。地域には伝統的慣習や近代的機構、さらに親族、地縁などさまざまな要素が絡みあって、人々の間に力関係が生じている。一つの「国際協力」によって個々人が直接にメリットを得るか得ないかだけでなく、それまでの人間関係を基にしてさまざまな反応が現れてくる。画一化した「地域住民」など存在しない。したがって、「地域住民の声を反映した協力」「草の根の協力」「上からではない素朴な協力」などという言説は、政策的スローガンとしては有効であっても、社会科学的に「国際協力」を考察する場合には、ほとんど意味をなさない。逆にこのような主張を単純にしている人は、状況に無知か無関心であると言わざるをえない。

また、しばしば指摘されているように依存性の問題もある。ジュンベシ

の学校が他の学校に抜きん出てよい結果を残しているのは、ヒラリーが関係するヒマラヤン・トラストや他団体から継続的に支援や援助が入るからである。ヘルスポストも諸団体からの薬品の提供がなければ維持していくことができない。

さらに、「国際協力」は地域に影響力を与えるが、時の経緯とともに、当初「してあげる側」も「してもらう側」もまったく予想もしなかった事態が起きてくることがある。ヒラリーは40年以上にわたってソル・クンブ地方の発展に尽くしてきた。しかし、その結果、彼が予期できなかった結果も多々起きている。例えば、シェルパの村に学校をつくったのは、純粋な気持ちで子供たちの成長を願ったためと思われる。しかし、その結果今のジュンベシが高齢化と過疎の村になりつつあることを予測したであろうか。学校が高校まで完成し、卒業生が首都カトマンズの大学に行くようになる、当然のように彼らはそこに仕事をみつけ、故郷に戻ってこなくなる。一人くらい村に戻ってきて教員をやって欲しいという校長の願いはかなえられそうもない。

このように「ある種の動機で一定地域に協力・援助がおこなわれ、おおきな影響を与えるとともに依存性が常態化し、さらに協力者も受益者も予想できなかったような結果や社会的状況が生じてくること」を、ヒラリーのネパールにおける業績にひっかけて、関西学院大学の古川彰は「ヒラリー・シンドローム」と呼んだ。(古河、結城：1996)

再び強調しておかなければならないが、私たちはヒラリーの善意や情熱を疑うものではない。また、その結果を賞賛するつもりも、否定するつもりもない。私たちが考えているのは、「国際協力」の事例を理念的や情緒的に捉えるのではなく、さまざまな人間が巻き込まれ複雑化した過程として社会科学的に考察したいということである。

「国際協力」は「国際」+「協力」ではなく、一つの方向性と価値をもつ非対称的活動である。「してもらう側」と「してあげる側」の関係性が暗黙のうちに存在している。私たちが調査をしたネパールの山岳丘陵地帯で

は、この非対称の「国際協力」がまったく浸透していない村を探すほうが困難である。それでは、「してもら側」にはどのような状況と戦略があるのであろうか。

「貧しい」ことを武器にして、外国人から協力援助を獲得する方法は、ネパール政府から村の住民、子供たちにまで広く浸透している。この状況を文化人類学者のドール・バハドール・ビスタは「最貧国シンドローム」と呼んで分析している。(Bista: 1991) 彼はヒンドゥー教が醸成してきた輪廻観や運命論が、ネパールをして自ら進歩や開発に向かうエネルギーを妨げ、他者へ依存する体質を生み出したと説明している。しかし、ネパールの人々を単に「物貰い主義」と考えることはできない。「国際協力」が各地域の政治力学、社会学と強く結び付いていることを認識する必要がある。

1980年代は日本のODAの額が増えたと言うだけでなく、日本の経済好調を背景に「国際協力」がトレンド化、あるいは「大衆化」した時代であった。国際協力に関する多くの市民団体やボランティア団体が設立された。私が最初に就職した「八千代国際大学」はそのブームの中で新設された大学だが、80年代から90年代にかけて日本国中に「〇〇国際大学」が開学されたり改称されたりして雨後の竹の子のように誕生した。⁽³⁰⁾

ネパールにも多くの日本の団体が支援対象を求めて入ってきた。そのような状況下では、多少誇張して言えば、特定の地域における優れた村長や校長とは、政策通や教育理念の持ち主ではなく、外国から援助を引き出し、地域のインフラ整備や活性化に寄与する人となる。近隣の村々でさまざまな援助・協力で施設が建設されているという情報が飛び交う中で、何もできないのは指導者として無能であると住民に考えられても不思議ではない。外国人から何も得られない無策な村長や校長の任期が長く続くことはない。⁽³¹⁾

このような現象が外国人の存在とその協力によって突然に引き起こされたわけではない。従来より地域の「公共」のために何かをなすことは、社

会的権威や政治的力を増強するための大きな手法であった。財をなした人が地位の上昇のために、寺院に寄進をしたり仏塔を建設したり、休息所や道路、橋を整備することは、一般的なことであった。この現代的な変種が「国際協力」であるとも言える。外国人と関係をもち援助を引き出せる、あるいはそのような窓口になれることは、社会的に大きな力なのである。

私たちがネパール丘陵地帯の村落にいくと、しばしば校長が訪ねてきて学校に招待される。そこで多少とも寄付をすると、次回には生徒たちが校門のところで一列に並び、手作りの花輪を首にかけてくれるであろう。ボランティアとして学校をつくった人は、誰でも体験するパフォーマンスの一つである。私たちはこの子どもたちがかけてくれる花束の意図と象徴性をもっと考える必要がある。

もちろん、村長や校長たちが単に自分たちの個人的な野心だけでこのような行為をとっているわけではない。地域の活性化や子供たちの将来を純粋に熱望する気持ちも十分にあるであろう。人間はさまざまな動機、目的、感情が複合して行動をおこすものであり、一つの要因に帰結できるわけではない。

一方で、地域には行政機構や教育機構とはまったく異なる権威や力の体系が並行して存在する。例えば、ネパールにはおいては、ヒンドゥー教の祭司やチベット仏教の僧侶、あるいはカーストやクラン、親族関係などはこれにあたる。彼らの中には自分たちの権威の衰退につながるかもしれない「国際協力」には反目したり、無関心を装ったりするものがでてくる。

すなわち、このような複雑な人間関係の中で「国際協力」は進行しているのであり、同質的な「地域住民」などという概念は、現実から遊離したモデルにすぎない。したがって、「市民どうしの連帯」とか「住民参加型開発」というスローガンは「してあげる側」の思いこみにすぎない場合が少なくない。社会科学の対象としては多様な社会関係・人間関係にもっと視線を向ける必要がある。

それではもう一方の当事者である「してあげる側」はどのような状況に

あるのでしょうか。田村正勝（早稲田大学）は、近代化の行き詰まり感の中で「市民活動や国際協力の主体」は「自己のアイデンティティを探索し続け「個」を形成し続け」「物的欲望の充足から価値体系へ、自己表現、異質性の表現など個人にとって意味のある生活を大切にする」人々と指摘している。（田村：1999 p.5）すなわち、物欲や金銭欲にあふれ、個人主義・自由主義による人間関係が希薄化した閉塞状況の社会で、異質性を個人にとって意味のあるものとした人々であるというのである。しかし、この状況の押し進めると、「国際協力」の文脈においては、相手の状況は無関係・無関心となってしまおうという落とし穴が待っていることになる。

1992年に日本ネパール協会主催で「子供と開発」に関する学会とシンポジウムが開かれた。そのときネパールで教育支援をしている20近くの団体が発表した。その後もたびたびネパールに学校をつくりたいという相談を持ちかけられたり、実際につくった人の話を聞かされた。毎年古着や文房具を持ってネパールを訪れる人も少なくなかった。正確な数字はわからないが、おそらくネパールの学校づくりや教材文具支援に関係した団体は、当時、日本だけでも200は越えていると言われていた。

ところで驚くべきことは、援助団体の多さだけではない。多くの関係者が学校建設には熱心であっても、ネパールの教育制度や生徒の状況に関しては、ほとんど無関心であるか無知なのである。小学校が何年生まであって、中学校、高校が何年間あるかも知らない人も少なくない。ネパール教育省が作成している教育の目的（1990年までの王制時代は国王への崇拜と忠誠が教育の第一目的になっていた）、教育制度の歴史的変遷、低学年の教科や教科書の内容について質問してくる人はめったにいない。識字率や登校率の統計的低さに嘆いても、それが現場でどのような意味をもっているか探索する人はいない。地域における学校の社会的意味や、まして、校長の思惑や戦略を考えることもない。

教育支援をしている多くの人は善意の人であり、「教育こそが子供たちの将来を開き、国を良くしていく」とステレオタイプ的に考えているよう

に見受けられた。日本の「近代化」の成功とネパールの「貧困」の克服を心に抱いているのであろう。彼らの関心はネパールの教育の状況にあるのではなく、自分が「貧しい」ネパールに学校や校舎をつくるという点にかかっている。自分たちが校舎をつくった、そこで「貧しい」身なりをした子どもたちが一生懸命勉強する、学校を訪れるとその子供たちが「ナマステ」「ナマステ」と迎えてくれる・・・このような状況の中にこそ、自己のアイデンティティを発見し、個人にとって意味ある人生を体験できるのである。ここでは相手の状況のいかんにかかわらず、自己の「生きがい」としての「国際協力」が重要となってくる。事例としてあげたヒラリーの寄宿舎も、私たちが建てたパタン日本語学校もこのような文脈の中で読み解くことができる。

私たちは大衆化した「国際協力」をやめるべきであると考えているわけではなかった。善意や誠意を認めるし、「してもら側」の「野心」や「してあげる側」の「生きがい」を否定するつもりはない。それぞれが異なった思惑の相互作用として「国際協力」が成立するのは当然のことである。しかし、両者の間に根本的に異なった意図があるにもかかわらず、共通の認識と連帯性に「国際協力」が支えられていると考えるようなナイーブな解釈にはついていけない。連帯性が認められるのは、ある意味のエリートどうしの利害が一致をした場合である。

最初のペルーの体験に戻ると、大衆化した「国際協力」は「残飯性」の上になりたっていると思われる。「私たちが捨ててしまうような古着や文具も途上国にもっていけば立派に役にたつのだ。」という「残飯の論理」に多くの人が共鳴し協力していた。これはこれで役にたっているので否定すべきことではない。一方で、来日した外国人の身元保証人や家賃、ローンの保証人に進んでなってくれる人は極めて少ない。自分の食べ物まで影響を受ける可能性のあることを避けようとするのは人間の本性かもしれない。

「国際協力」という正のイメージの増幅の中で見落とされがちな問題をあえて指摘したつもりである。私自身も十数年間NEPA会の活動に参加

し、ネパールのバタンに日本語学校を建設する一員となった。その後、その学校の卒業生の中から優秀なものを選抜し40数名を日本で勉強させるために招聘している。

これらの活動の中で、日本人側の「思い」と「身勝手さ」、ネパール側の「思い」と「身勝手さ」の両者の間の矛盾や誤解に悩まされ、板挟みになったことが何度もある。それぞれの側の個々人が、面倒臭さ、苛立ち、無力さを感じながら、その一方で、楽しさ、充足感、連帯感、生きがいなどを感じてきたと思う。そのために、この活動は10年以上継続することができた。

6. 青年海外協力隊

白鷗大学に着任した2003年、時を同じくして国際協力事業団（JICA）のボランティア事業である青年海外協力隊の「村落開発普及員」という職種の技術顧問に就任した。青年海外協力隊は1965年に「開発途上地域の住民と一体となって当該地域の経済及び社会の発展に協力することを目的とする海外での青年の活動を促進し、及び助長する」（国際協力事業団法第21条（2））された。私が技術顧問になってすぐの2003年10月に国際協力機構の名のもとに改組され、緒方貞子理事長を迎えて新しい時代へと突入した。また、「住民と一体となって」が「住民を対象とし」に変更され、「経済及び社会」の後に「又は復興」の文字が入って、隊員活動の方向性が多少変容した。（独立行政法人国際協力機構法第13条（3））

私の担当する「コミュニティ開発」（2013年に「村落開発普及員」から改称）は、「地域住民が望む生活向上や地域活性化への寄与を目的としています。フィールドワークや住民参加型のワークショップを企画・運営し、地域や住民の状況、ニーズ、課題を把握することが出発点となります。住民とともに、人的資源・地域資源を最大限活用し、地域の開発課題解決のために活動します。活動分野は、農業普及、保健医療、水・衛生、地場産業振興、村落開発事業など、地域の開発課題に合わせて多岐にわ

たっています。」(JICAホームページ)と定義された。

JICAの技術顧問になることによって、国際協力そのものや、国際協力による地域の変容を調査分析するだけではなく、日本の若者がいわゆる「途上国」の現場で地域開発を進めていく上での思想、視点、手法、課題などを実践的に考えなくてはならなくなったのである。青年海外協力隊としてコミュニティ開発に関わりたい応募者を選考し合否を下し、彼らを研修し、任国に送り出す、さらに現地からの活動に関する質問に答え、帰国後の進路の相談をのる。このような形で関与した隊員はこの18年間に2500人は超えていると思う。

さらに、2002年のベトナム調査出張をかわきりに、タイ、スリランカ、フィリピン、ネパール、モンゴルのアジア諸国、グアテマラ、ペルーなどの中南米、直近では2020年2月にチュニジアを訪れ、現地調査を実施したり、現地政府の開発担当官と意見交換をしたり、隊員に対して、あるいは彼らとともに住民に対してワークショップを実施したりしてきた。また、東京のJICA研究所で短期集中型のコミュニティ開発研修を企画実施したり、群馬県甘楽町、鹿児島県鹿屋市において隊員のためのフィールドワーク研修の場をつくりあげた。このような実践の中で私自身も書物からとは異なる現場の状況を学ぶことが多々あり、次第に地域開発に関する課題や視点、手法が整理されていった。隊員たちには現地のフィールドワークの重要性を説いていたが、私は隊員たちの活動をフィールドワークしていたのである。⁽³²⁾

鈴木紀(千葉大学→国立民族学博物館)は20世紀後半の「開発の考え方」を4つのレベルに分けている。1つめは、「近代化論」で1950～1960年代にかけてアメリカの覇権が確立し東西冷戦の対立が激しくなるとともに植民地が次々と独立した時代に出てきた考え方である。「開発とは人々の暮らしがよくなること、便利で快適で清潔な生活がおくれるようになること」と定義し、開発経験の乏しい途上国に対して、先進国の豊富な経験・技術・資金を投入すれば生活水準が向上して人々が豊かになるというもの

である。このような考え方は、いまでもJICAなどには強く残っている。

2つ目はいわゆる「従属論」と呼ばれるもので、先進国の支援援助の果実は先進国の繁栄につながり、途上国の開発の可能性をかえって低めるというものである。したがって、「開発とは資本主義・市場経済の価値中立性が格差をうみだし拡大していることを認識して、その格差をなくすための活動」とすべきであるという。フェアトレードの発想も、すべてを市場制度にゆだねるのではなく、弱者が開発過程から排除されないような政策とすべきであるという考え方に基づいている。

3つめは、「持続可能な開発論」と呼ばれるもので、1972年のローマクラブの『成長の限界』に触発され、「開発とは人類が永続的に資源や自然を利用できるような仕組みをつくっていくこと」とした。資源のリサイクルや人口激増を防ぐための家族計画の導入、土着の思想・技術が見直され、今日のSDGsにつながるような開発試みが実践されるようになった。

4つめは、「アイデンティティ論」と呼びうるもので、「ポストモダニズム」の知的潮流によって、国家、国民、共同体などの固定概念の脱構築により、先住民、女性、最貧困層、低カーストなど社会的マイノリティ・弱者に光をあてて主流化するという開発である。(鈴木：2001)

その後、サセックス大学のロバート・チェンバースが提唱したPRA (Participatory Rural Appraisal：主体的参加型農村調査法) やPLA (Participatory Learning and Action：参加型学習と行動) が開発に関与する多くの人々に影響を与え、住民参加型手法が重要視されるようになった。

上記の理念や思想はどれが正しくてどれが誤っているというものではない。それぞれが開発現象に対する視点や方向性を内包しており、部分的には正解となることもある。協力隊員にはこのような多様な開発思想があることを提起し、各自が「深堀をして」「引き出しをつくり」、現場での活動につなげるように指導してきた。つまり、一つの考え方を原理的に「信仰」しないこと、一般に流布している「開発言説」の真偽を疑ってみる態度を涵養するように話している。

それでも、現場に行った隊員は着任初期の頃にはさまざま障壁にぶつかる。彼らは着任して3ヶ月ごとに報告書を協力隊事務局に送らなければならない。私は彼らの報告書が届くことは楽しみであったが、時には心痛や焦燥を感じるがあった。いくつか例を見てみよう。

「とかげはいつも部屋のあちこちにいる。「耐えられない。」私の家での口癖だ。ここでの生活はとかげとの戦いになりそうだ。」(この「とかげ」というのは東南アジアでよく見かける大型のヤモリのことである。この隊員はこのヤモリが気になり、不眠症になってしまう。)

「赴任して四か月、何もやっていない。・・・事務所に座っているだけで、管轄の開拓地でどのような業務がなされているのか、わからない。業務水準を見る前の段階に私はいる。」(言葉が通じず、何をやっていいかわからず、引きこもってしまう隊員もいる。)

「B国人は・・・乗り降りのとき横から割り込んできたり、順番を待つ習慣がない・・・南の方に位置する国はやはり似ている点が多いのかと考えてしまう。」(これを書いてきた隊員は、イギリスに留学し、TOEICの点数が極めて高く活躍を期待していたが、現地になかなか溶け込めずに悩んでいた。)

「新しいやり方・工夫をすることにあまりオープンではない印象を受けた。私にとって何がやる気を失わせているかというところ ①やっている仕事の評価されない→ ②やりがいが無い→ ③やる気がでない、ということだ。私がやった／やろうとしていたことも、ここの人たちのレベルに合わなかったのかもしれない。」(ついつい自分の基準で仕事を見てしまう。)

「日本から原動力としていた国際協力の意思、開発のモチベーションが、今までの勢いを失っていくのが手を取る様に実感していくのも、また空しくて、D国D村で南十字星が降る中、儂い夜を過ごしていました。」(「お～いがんばれよ」と、声をかけたくなる。)

このような報告内容は珍しいものではない。文化人類学のフィールドワークの特徴として、「調査研究しながら生活していく」、「生活しながら

調査研究していく」と書いたが、青年海外協力隊員も「活動しながら生活し」「生活しながら活動して」いかなければならないのである。そして、報告書を見る限り、彼らが不適応を起こす要因が次の7つの要因が複合化しているように感じてきた。

1. 生活能力、適応能力が乏しい
2. コミュニケーション能力が乏しい
3. 自分の技量、能力、情熱と相手の期待、希望の格差に適応できない
4. 異文化に対する想像力・理解力に乏しい
5. 自分の活動を作り出すことができない
6. 配属先の人間関係、システムに適応できない。
7. 隊員相互の関係をうまくできない

このような危機的状況やカルチャーショックはどの隊員も経験することである。すぐに立ち直る人もいれば、途中で挫折して帰国する人もいれば、2年間無為に過ごす人もいる。しかし、大半の人は、時間をかけつつも次第に適応していく。「立ち直り編」としていくつか例をあげる。

「思えば、今までは自分を守るために精一杯だった。先の見えないことに対する不安。厳しい自然環境や生活環境との闘い。・・・言葉をあやつれないことに対するもどかしさ。・・・はじめて抱いた望郷の念。今まではあって当然と考えていたもの・・・物質的には勿論、「プライバシー」などといった非物質的なものも含めて・・・を失ったことに対する焦り。E国人の何気ない一言が心に刺さり、涙をこらえたことも多々ある。・・・知らず知らずのうちに異文化理解の基本である「相手を尊重すること」を忘れてしまった気がする。」

(少しは自分のことを客観的に見れるようになってきた。)

「日がたつにつれて、F国の状況も理解できるようになり、障害に対して寛容になった。本来の仕事から脱線してしまう場合は目立たないようにする。バランスよく仕事をする。頼んだ仕事途中で止まっている場合は必ず理由があるので、すぐに腹を立てず、上司に言いつける前に、理由を

探って解決する。時間がかかることを前提に、あせらず気長に待ちながら、とりあえず他の方法を見つける。」(仕事のやり方がわかってきた。)

「一年経った今、私は農業局の一員として迎えられていると感じる。この「内」と「外」をはっきり分ける社会で、「内」の人間として扱われていると感じる。ずっと年上の同僚から、愚痴や弱音、弱点や秘密を、こっそり打ち明けられるようになった。誰かが私を批判すると、他の誰かがかばってくれるようになった。同時に私自身も変わったのだと思う。打たれ強くなった。辛抱強くなった。慎重になった。あるものの中で自分なりの楽しみを見つけて、それを大切にするようになった。ちょっとのことでひるまなくなった。」

このような報告を読むと、彼らが着任当初戸惑ったり、悩んだり、不安になったり、やる気が失せたりしていたことを知っているだけに、胸が熱くなってくる。青年海外協力隊に行くと、時として現地に与える技術協力の影響よりも隊員の学びの方が大きくなることがある。現場が彼らを育ててくれるのである。青年海外協力隊はキャリアではなくキャリアパスであり、任期終了後に日本国内や国際機関で活躍している人は少なくない。

しかし、それでも途中で挫折して帰ってくる隊員もいる。そのような隊員の数を極力少なくすることが、技術顧問の果たすべき重要な役割である。あるとき任期短縮して帰国した隊員の頓挫した原因を探るために、出張調査に行ったことがある。具体的要因はさまざまであったが、一般に共通していたのは、「何をやっていいのか分からなくなる。現地における自分の存在意義が分からなくなる。」という状態であった。これでは活動を継続してやる気をもってコトに当たるのは無理である。さらに、彼らが現地や現場のことを知ろうとせず、調べようとしていなかったことも判明した。

コミュニティ開発には最も重要で根本的な特質がある。コミュニティ開発はすべて個別的で相互作用的であるということである。つまり、ある村に隊員が入るとして、誰が入るかでその結果が大きく異なってくる。コミュニティ開発に関わる人材の能力、知識、知見、知性、性格、人柄、動

機などさまざまな人的要素が活動を左右することになる。すなわち、コミュニティ開発には「こうすればうまくいく」というようなマニュアルはないのである。

開発の研究者や専門家のなかには、地域開発や収入向上のための手法やマニュアルを作成することに熱心な人がいる。特定の地域や村で成果の上がった手法が世界のどこでも普遍化して活用できると考え、その手法を世界中に拡散しようとする。しかし、私たちはそのような考え方をとらない。「現場の暮らしの内実が知らされないままに、「問題」の解決のための処方箋が「途上国」や「アフリカ」の支援の現場に一方的に提供され続けているのである。」(友松：2019 p.10) コミュニティ開発がすべて個別のであるならば、現場をモデル化しマニュアルを作成することよりも、人材を育成することのほうが重要になる。⁽³³⁾

そこで上記のような挫折する隊員を少しでも少なくするために、人材育成としてのフィールドワーク実践を提唱するとともに研修に取り入れることにした。教育現場でフィールドワークの効果が認められるようになってきたからである。

原尻英樹はフィールドワークとは、「人の話を真摯にうかがい、人々のコミュニケーションを通して、それらの人々への理解を深めると同時に、自分に対する理解も深める活動」としている。「話を真摯にうかがう」というのは「自分のもっている論理的能力、他者との共感能力、それに感性をフルに動員して、自分のもっているすべての能力を使って、相手の理解のために努力する」ことだとしている。つまり、話をただ聞くだけでは不十分なのであり、自分の能力を最大限活用して、「相手のこと理解すること」が重要となる。他者を理解をしようとする営為を通して、その時点での自らの能力の限界に気づきながら、自分自身の今後の潜在的可能性を発展させることがフィールドワークの目標となる。(原尻：2006)

すなわち、フィールドワークは研究者の調査方法というだけでなく、大学教育においても、非常に効果的であることを示したのである。それと同

様に、フィールドワーク研修は、JICA海外協力隊員、特にコミュニティ開発隊員を育成するうえで、大きな成果をあげることがわかってきた。

そこで派遣前研修ではフィールドワークの重要性を強調するとともに、若くて社会経験の少ない隊員にはフィールドワークの実践的研修を施すことにした。幸い、鹿児島県鹿屋市にあるアジア・太平洋農村研修センター（カピック）が全面的に支援してくださり、高隈地区の住民の協力で3週間にわたるフィールドワーク研修を年に4回実施することができた。この研修は隊員の能力向上のためにかなり効果的であった。

現在、JICAのボランティア事業は大きな曲がり角、あるいは危機的分岐点に来ている。新型コロナウイルス感染症の世界的拡大の影響で、派遣されていたJICA海外ボランティアは2020年3月にすべて一時帰国を余儀なくされた。2021年に入って一部の国への派遣が再開されたが、まだ長いこと日本に待機している隊員がたくさんいる。また、JICA事務局は、対面型の研修をやめオンディマンド型教材の使用やオンラインの研修の導入を進めている。これは私たちが考える人材育成法の対極にあるものであり、現場で力強く活動できる隊員を育てることができると憂慮している。

私自身はこの10数年、地元の小山でまちづくり、地域活性化に取り組んできた。日本のまちづくりにおいても、方法論よりは人的資源のほうが重要であるというのは「途上国」のコミュニティ開発とまったく同じである。一村一品運動の原点と言われる大分県大山町（現日田市）の「ウメクリ植えてハワイへ行こう」運動は、矢幡治美という強力なリーダーがいたから成果をあげることができた。町役場職員として矢幡のもとで勤務した緒方英雄は、まちづくりには「リーダー」が必要であるし、「リーダー」とは人を納得させて人を動かすことのできるひとであると語った。人を動かすには、「熱意と夢」「愛郷心」「中央や権力からの独立心」「実行力と責任感」「洞察力と発想力」「情報収集力」「フットワークとネットワーク」「魅力的なキャラクター」が必要であり、さらに「政治的センス」「経済的センス」「地理的センス」「歴史的センス」がなければならないと言う。（緒

方とのインタビューより)

大分県の一村一品運動は知事の平松守彦、徳島県上勝町の葉っぱビジネス「彩」は農協職員の横石知二、新潟県村上市の町屋人形さま巡りには吉川真嗣、身近な所では「餃子のまち宇都宮」は市役所職員の塚田哲夫がいた。彼らがいたからこそ、その名が広く知られるようになったのである。寝食を忘れるくらい没頭し、情熱をもって取り組む人がいない限り、まちづくりや地域活性化は大きな成果をあげることはできない。

私たちはコミュニティ開発やまちづくりに関して先人の事例を学ぶことはできるが、その方法論をそのまま手本とすることはできないと考えている。2021年度NHKの大河ドラマでとりあげられて話題になっている渋沢栄一の「真似をするときには、その形ではなく、その心を真似するのがよい。」という言葉は地域開発にも当てはまる。

最後にロバート・チェンバースの次の言葉を紹介してこの項の終わりとしたい。

「開発の専門家として今を生きることは、素晴らしくエキサイティングなことである。多くのことが非常に速く変化し、常に新しい可能性が開けてくる。ついていくためには、多くのことを学び、また思い切って学び直さなければならない。」(チェンバース：2011)

7. おわりに

2003年、私は白鷗大学の教壇に立つことになった。4月第一週目に鬼怒川のホテルで開かれたフレッシュマンオリエンテーションあとの教員懇親会では、上岡條二理事長(当時は副理事長)はじめ、諸先生方が私を暖かく迎え入れてくださったことを今でも覚えている。

白鷗大学の学生のほとんどは研究者を目指すというより、社会人としての能力を向上するために入学してくる。したがって、私たち教員はそのニーズに応える教育をしなければならないと最初から思っていた。200人近い受講生のいる授業では、どうしても一方的な講義になりやすい。私た

ち教員は知識を「伝えよう」とするが、「伝えること」が「伝わること」にはならないという現実は、教育現場にいるものであれば誰でも経験していることである。私たちは「知識」を伝えるのではなく、「智慧」を伝えるなければならないという人もいる。「識る」ことは、頭で「知る」とことは異なります。心の奥で感じ、五臓六腑に沁みわたるように理解されることです。」(若松：2021 p.37)

一方、「学生は、大学の授業の内容なんて、やがては忘れる。自分も大学で受けた講義の中身は、ほとんど覚えていない。」(松村：2017 p.180)と、いなおりとも思える切り口から入る人もいる。「おそらく学生に残るのは、教壇の前で誰かがなにかを伝えようとしていた、その「熱」だけだ。・・・授業で語られる言葉、そこで喚起される「学び」は、・・・どう受けとってもらえるかわからないまま、なになにつながるかが未定のまま手渡される「贈り物」なのだ。(同書 p.181) この「熱」を発することが、つまり「発熱体」になることが、大学教員の一步かもしれない。

文化人類学の講義でとりあげられる題材は、東南アジアの焼畑耕作民の生活であったり、アフリカの高原の牧畜民の結婚の習慣であったり、40～50年前の日本の農村の伝統的生活であったりする。それは個々の多様な生活様式を紹介しただけではなく、学生たちの日常性、常識、既成観念、思い込みをずらしたり、ひっくり返したりしたいからである。学生は講義だけでなく、サークルやアルバイトや友人、恋人、家族などの人間関係やSNSに追われながら日常生活を送っている。そのなかで講義で彼らにインパクトを少しでも与えるには、「熱」と「楽しげ」に語ることは重要となってくる。

一方、講義には楽しいだけでなく緊張感が必要となる。弛緩した雰囲気では学生たちは集中することができない。⁽³⁴⁾そのため、インプットだけでなく常にアウトプットを要求した。それは、講義のはじめの15分で前回の授業内容から重要なポイントを提示し、それについて書かすものである。授業中に集中して理解したうえでノートをとり、きちっと復習をしていな

いと回答できない問題を出した。これは単に文化人類学の知識を学ぶというだけでなく、短い時間で頭を整理して読みやすい字で文章を書くという訓練もともなっていた。15回続けると学生たちも慣れてきて文章をまとめることが上達してくる。毎週、300人以上の答案を採点するのは負担ではあったが、エンパワメントとしての効果はあったと思う。

識字教育において有名な教材、北代色の「手紙 夕日が美しい」の中に「夕やけを見ても あまり うつくしいと思わなかったけれど、じを おぼえて ほんとうに うつくしいと思うようになりました。」という一節がある。この文章をとりあげて、なぜ「夕日が美しいと思うようになった」をワークショップでしばしばとりあげている。背景には貧困と差別という問題があるが、「文字」を知ることによって、彼女の心持ちがどうして変わったのかを考えさせた。

私は学生たちに「夕日は美しいものだ」という知識を教えるよりは、彼らを山の高みに連れていき、雲の流れ、風の音を感じながら「夕日はこんなにも美しいものなのだ」と彼らが自ら実感できるような教育をやりたいと思っていた。マニュアルなき社会の中で、力強く生きていく実践的な智慧を与えるにはどうしたらいいか考えていた。しかし、私と学生の相互作用の中で、「真実」に触れるようなものを創りあげるのは容易ではない。その一つの方策として「越境」という取り組みをやった。

「越境」とは「教室」「大学」「ともだち」「サークル」「アルバイト」などの枠組みからとりあえず飛び出して、新しい人々や状況に出会い、新しいことを発見することに重きをおく考え方である。

2003年に私が白鷗大学に着任した時は、経営学部のビジネスコミュニケーション学科に配属になった。このコースは3ヶ月の短期留学を必修とし、英語によるコミュニケーション能力と異文化理解力の向上を目標としていた。そこで2004年に意欲ある学生を集めて「ハイネット」(Hakuoh Interculture Network) という団体を立ち上げ、ネパールの著名な音楽家や画家を招聘して演奏会や展示会をやったり、留学生のパネルトークを企

画実践したり、国際交流・協力活動を推進した。

2006年からは、宇都宮大学と作新大学の教員と協力して「国際キャリアセミナー」を実施した。これは将来国際的な仕事や活動を希望している学生を対象に、分科会・ワークショップ形式で実施される2泊3日の合宿セミナーである。講師には国連事務次長をやった明石康、現在でもテレビで活躍している柳澤秀夫（当時NHK解説主幹）、国際NGOの先駆けのシャプルーニール理事の吉田ユリノ、日本語教育の第一人者佐久間勝彦（当時聖心女子大副学長）をはじめ、かなりの著名人が含まれていた。

さらに、2007年には国際医療福祉大学の教員と同校ボランティアセンターの職員、栃木県社会福祉協議会、NPO法人の代表理事などと集まって「とちぎ学生未来創造会議」（未来会議）を設立した。学生たちに社会課題の気づきを与え、彼ら自身で問題解決法を探る、やはりワークショップ中心の合宿形式のセミナーである。

そして、2009年にこの未来会議の活動実践団体として「未来創造ネットワーク白鷗」（未来ネット）が白鷗大学教育科学研究所の学内事業プロジェクトとして設立された。2009年4月に私は経営学部から教育学部に移籍した。そのゼミに非常に優秀な学生が集まり、6月に福島県の民宿で合宿をし、二日間で立ち上げた。代表の向後郁乃（児童教育専攻）がみんなをまとめ、副代表の五十嵐千尋（児童教育専攻）が規約の作成から登録方法まで担当した。ここで培われた学生の意欲や意識は未来ネットの活動に代々つたわり、現在でも継続している。この11年間における試行錯誤、組織運営、実践活動は多岐にわたっていたが、学生の能力向上と地域貢献という視点から、時間があったら総括してみたいと思う。

さて、最後に70歳になり、文化人類学を50年生きてきた身から見ると、現在、そして未来の世界や日本をあまり晴れ晴れとした気持ちでは見ることができない。幼い頃は敗戦の残滓が漂い、小学校の頃はドラえもん的空き地空間で遊び、高度成長や学生運動、オイルショック、しらけ時代、ジャパン・アズ・ナンバーワン、バブル経済とその崩壊、阪神淡路大

震災、就職氷河期、東日本大震災・・・といろいろな山や谷、凧やうねりがあった。しかし、現在はひとり一人が極めて生きにくい社会になったと思う。

「無縁社会」をNHKスペシャルでとりあげ放映されたのは2010年である。それは、「身元不明の自殺」や「行き倒れ」、「餓死」や「凍死」。全国の市町村への調査の結果、こうした「無縁死」が年間三万二千人にのぼる」ことにNHKスタッフが衝撃を受けたことからはじまった企画である。(NHK「無縁社会プロジェクト」取材班：2010)そして、この放映そのものが人々に大きなショックを与えることになる。しかし、それから10年たつが状況が改善されたという話は聞かない。今の「生きにくさ」は人とうまくつながれない、孤独な人をたくさん作りだしていることと無関係ではない。

「高速度化する現代社会は、安定した人と人のつながりが非常にづくりにくい」システムの中にあり、「孤立感を深めたバラバラの人たちがつながる方法が、一時的で感情的」に反応し、「小粒化した正義観が社会を覆う今、日本はとてつもない窮屈で生きにくい社会」である。(先崎：2020 p.6)

ひとり一人を包摂する社会的システムが虚弱化し、包摂されない孤立した個人が寂しさのあまり他人を攻撃するというのは健康な姿ではない。社会全体に寛容性が乏しくなり、メディアに煽られて「不倫」だ、「接待」だ、「差別」だと本質を何も考えずに表面的に個人を糾弾し、そしてそのことをすぐに忘れてしまう。ネットやSNSの利用は便利になったようで、逆に人々を縛り忙しくさせる。「超多忙社会」の出現である。「人間なんか周りにいなくても構わない。アパートの部屋でひとりっきりでもいい。ただし、スマホがあれば。」という感覚は文化人類学者として危機感を持たざるを得ない。単なる電子的機器であるにすぎないスマホを、触っていないと情緒不安になり、スマホが見えないとパニックを起こすという状況は、どう考えても異常である。

さらに内閣府は「我が国が目指すべき未来の社会」としてSociety5.0を

提唱した。狩猟をSociety1.0、農耕を2.0、工業を3.0、情報を4.0とする単純で粗雑な歴史感は信じられないが、「Society5.0で実現する社会は、IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出すことで、これらの課題や困難を克服します。また、人工知能 (AI) により、必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車などの技術で、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されます。社会の変革 (イノベーション) を通じて、これまでの閉塞感を打破し、希望の持てる社会、世代を超えて互いに尊重し合あえる社会、一人一人が快適で活躍できる社会となります。」というのには驚いてしまう。AIによって「少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などの課題が克服されます。」とは、どのような根拠があって書いているのであろうか。「これまでの閉塞感」とは何を意味しているのであろうか。私たち古い世代から見ると、ここに書かれているのはユートピアではなく、デストピアである。

荘子の話の中に以下のような逸話がある。

孔子の弟子の子貢が農作業をしている老人に会った。その老人は、井戸を下りて非効率的な水汲みをしていた。子貢は「おじいさん、世の中にはもっと便利な機械があるんですよ。・・・水を簡単に汲み上げることができるんですよ。」とアドバイスをすると、「そんなことぐらい知っているよ。だが、機械があると機械に頼る心が出てきて、生まれながらの無為の境地を無くしてしまうだろう?・・・ワシはその機械を知らないのではなく、墮落したくないから使わないのだ。」とその老人は答えたというのである。(飲茶：2016 p.438)

2000年以上の前に、古代の賢人は、効率的になること、便利になることが人間を墮落させることを指摘していたのである。そしてそのことは現在でも変わらないと思う。⁽³⁵⁾

劇作家の平田オリザは、現代社会を「人口は少しずつ減り、モノは余っています。大きな成長は望むべくもない。逆に、成長をしないことを前提

にしてあらゆる政策を見直すならば、様々なことが変わっていくでしょう。もちろん原発は要りませんし、大きな開発も必要ない。オリンピックも本当に必要なかどうか。・・・夕暮れの寂しさに、歯を食いしばりながら、「明日は晴れるか」と小さく呟き、今日も、この坂を下りていこう。」と、下っていく覚悟を強調している。

私自身の価値形成には、20代に経験したフィリピン・ミンダナオ島の焼畑耕作民の世界が大きな影響を与えていると思う。衣食住をはじめすべてを自分たちで採集したり、狩猟をしたり、製作する自足的な社会。人々はつながり協力し、富の差ができないような仕組みをもった社会。時間よりも出来事が優先され、時間に縛られず深い「時」を生きているような社会。

もちろん、現在の日本でこのような世界に戻ることはできない。私はお金がなければ、翌日から食べ物すら手に入れることができない。パソコンがなければ仕事ができない。クルマにも乗るだろう。

しかし、「文化人類学を生きてきた」ものとしては、時間的にも空間的にも世界にはさまざまな「文化」があること、「文化」には優劣がなく相対的なものであること、「文化」は人々の意識が恣意的に境界をつくりあげたもので根拠のない「思い込み」であること、「文化」からもっと自由に生きていくこともできること、他者を知り・自分を知るためにはフィールドワークが有効な方法であること、世間やマスコミに流布している言説は疑ってみること、などなど・・・あと、どれだけ元気でいれるか分からないが、大学を辞めても若い人に向けて発信し続けていきたいと思っている。

謝辞

白鷗大学には18年間お世話になりました。上岡條二理事長には大変お世話になるとともに、勝手気ままにやっていた私に名誉教授の荣誉まで与えてくださり、心から感謝しております。また、教員のみなさま、職員のみなさまには本当にご親切にいただきました。特に私が奉職したときの前経営学部長佐野真先生、当時の学部長樋口兼次先生、研究室が向い合

せだった堀宏先生には、大学内だけでなく大学外でいろいろ楽しいお話をお聞きして勉強させていただきました。（飲みすぎましたが）佐野先生、堀先生はすでに鬼籍に入られましたが、3人の先生方には心から感謝しております。

学問的には中根千枝先生に深い学恩をうけています。「ゆうきくんは好奇心は旺盛だけど、向学心がちょっと足りないわね。」と叱咤激励されたことを今でも覚えています。70歳になるまで大学で教鞭をとれたのは、ひとえに中根先生のお教えによるものであります。亘純吉（駒澤女子大学名誉教授）先生は、私をJICAの青年海外協力隊の技術顧問に推薦くださり、その後も、隊員の研修や支援に関して多くの助言と指示をいただきました。途上国における村落開発やコミュニティ開発に対する考え方を深く学ぶことができたのは亘先生のおかげです。白川千尋大阪大学教授とは協力隊員の研修をいっしょにやり、そのお話から多くの刺激を受けました。学生時代の文化人類学研究室で同級生であった稲村哲也（愛知県立大学名誉教授）と清水展（京都大学名誉教授）は畏友とも呼べるもので、職場が遠くて接する機会がなかなかありませんでしたが、彼らとの友情は大きな財産でした。

白鷗大学においては、2009年に経営学部から教育学部に移籍しました。移籍後も私が所属する心理学専攻の先生方だけでなく、他の専攻コースの先生方とも楽しいひと時をたくさん経験させていただきました。伊崎専攻長をはじめ心理学専攻の先生方には多くのご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申し上げます。また、ゼミや未来ネットの学生たちには、いっしょにボランティアをしたり、イベントを企画開催したり、合宿で旅行をしたり、懇親会で盛り上がりだったり、楽しい思い出もいっぱいもらいました。みんな本当に素晴らしい学生でした。

最後に論集の編集委員長の渡邊忠先生には締め切りが遅れるなどご迷惑をおかけしました。

みなさま、本当にありがとうございました。

注

- (1) 「ブキドノン」という名称は「ブキッド」(山)に由来し、平地民たちが山や森林に住む先住少数民族に対して使ったことばである。1980年にブキドノンと区分された人口は約75000人、主にミンダナオ島中央部のブキドノン州の東部山地に住むが、隣接するミサミス・オリエンタル州やアグサン・デル・スール州にも分布している。彼ら自身は川の名前を使って、例えばウマヤム川流域に住む人は「ウマヤムノン」、プランギ川流域に住む人は「プランギオン」と呼んでいる。
- (2) 調査地であるマプロ村に到達するまでには、複雑な手続きややり取りで長い時間がかかった。私は文部省の「アジア諸国派遣留学生」として奨学金をもらい、アテネオ大学の「フィリピン文化研究所」(Institute for Philippine Culture)の客員研究員にいただいた。しかし、調査地の選定から手続きまでを自分一人でやらなければならない。最初の頃はフィリピンの事情がよくわからず右往左往した。ヴィザの更新に書類を出しに行ったとき、担当官は“OK, I can help you. But I think you can help me.”と言われた。私は何のことかわからず、そのまま帰ってきたが、友人に話すと、「“you can help me.”というのは書類の間にお金を挟んで提出しろという意味だよ。」と教えてくれた。当時はフェルナンド・マルコス大統領の時代で、このようなことは珍しくなかった。
- ミンダナオ島を調査地に選んだのは、まだ、そこに住む先住少数民族に関する報告があまり多くないことと、自給自足の生活をしている焼畑耕作民が住んでいると聞いたからである。焼畑耕作民に惹かれたのは、学部時代に教わった飯島茂先生のタイに住むカレン族の話が度をこえて面白かったからである。日本に住んでいる私自身は衣食住から趣味にいたるまで、貨幣なしには何一つ手に入れることができない。一方、彼らは自分たちの身の回りのものをすべて採ってきたり作ったりする。そのような人々の社会はどのようなものか興味をもったのが最初である。
- 1978年にタイのチェンマイ大学に民具の調査でいった。しかし、1975年に北ベトナム軍がサイゴン(現ホーチミン)を占拠し、ベトナムが統一されて共産主義国家となった。その後、カンボジア、ラオスも共産主義国化し、北タイの山岳地帯に調査に入れる状況ではなくなっていた。そこで、フィリピンに調査地を変えたのである。調査地選定にも政治が大きく影響することがある。
- ミンダナオ島に行くきっかけは、フィリピン大学にいた日本人留学生にたまたま話をすると、彼のガールフレンドが私の行きたいところの出身者であるということがわかった。さっそく彼女に母親宛ての手紙を書いてもらい、それを持って、突然彼女の実家を訪れた。娘の友達の友達ということで、とてもよくしてもらった。このことがきっかけでブキドノン州に知り合いがたくさんでき、調査地を選定するのを手伝っていただいた。
- フィリピンホスピタリティと友達のネットワークを大切にしているフィリピンの人々には今でも感謝している。
- (3) セパノ語はフィリピン南部のセブ島やボホール島を中心に話されている地方言語の一つで、著者がフィールドワークを行ったミンダナオ島においても、北部や中央部においては共通言語となっている。当時はフィリピン国語の元になったタガログ語に次ぐ話者数であった。調査対象の少数民族ブキドノンの人々は日常的にはピヌ

キッド語と呼ばれる独自の言語を使っているが、町にいく機会やラジオの影響で、セブアノ語を理解する若い人は少なくなかった。

- (4) 寄留したマドリッド夫妻には11人の子どもがいたが、家には10歳前後からまだハイハイしている乳幼児まで5人が残り、あとの年長の子どもは他の村や町にでていた。このパラグラフに出てくる英語とタガログ語がわかると言われていたのは彼らの21歳になる長女であった。マドリッド氏の妻は21年間に14人の子どもを産み、そのうち3人しか死んでいないので、とても幸運であると彼女は後に述べた。食事は彼女が調理して出してくれた。子どもが小さいからと言って、私はいつも家族とは離れて食事をするようになった。
- (5) 周囲の人々と一つもコミュニケーションがとれずに、ただニコニコして一日が過ぎていくのは本当につらい。夜に寝袋に入ると、頭の中に日本語があふれ出てくる。小説が書けると思えるほどである。持参した薬の箱に日本語で書かれた処方箋を読んで心を落ち着けさせたりした。電気もガスもない素朴な住環境よりも、意思疎通ができたことのほうが苦痛であった。
- (6) ブキドノンの人は、男性の仕事と女性の仕事を明確に分けている。例えば、薪集めや薪割り、森林の伐採、狩猟、森の中での採集、家の建築や屋根葺き、儀礼の執行などは男の仕事、調理・清掃・水汲み、育児、稲の種まき、イモの植え付け、ゴザやカゴづくりなどは女の仕事である。観念的にも「人間の手が入っていない自然」、すなわち森林は多種多様な精霊や邪霊が棲む「危険」な場所であり、そこでの活動は男性に委ねられている。一方、「人間の手の入った場所」、すなわち集落内や畑、家屋の中は外敵や邪霊からの「危険」が少なく、女性の活動する場となる。かれらは仕事を男女で分担し、互いに助け合うことで自足的生活を送ってきたのである。
- (7) 実際は私の浅薄な知識と慌てぶりにより、うまくいったわけではなかった。指の肉が出てきたところに直接脱脂綿で止血したので、翌朝見に行くと、脱脂綿が肉にくっついて離れなくなっており、ひっぱると痛がった。その脱脂綿の上からアルコール消毒をしておいた。しばらくして気がつくと、脱脂綿はなくなっていた。
- (8) キンカン金は金冠堂が製造販売している液体外用薬で、私の子どもの頃は火傷をしても、捻挫をしても、虫にさされても、しもやけができて、母はいつもキンカンを取り出して塗ってくれた。子ども心にキンカンは何にでも効く万能薬と思っていた。
- (9) 小児麻痺か何かで片足を引きずりながら山を越えて訪れてきた少年や、家に呼ばれ腹部全面が膿んでいる高齢の女性などの対応を頼まれると、いたたまれない気持ちになった。また、一度はある集落から大勢の人が私の住む集落にやってきた。聞くとその集落にいた複数の人が嘔吐や下痢で苦しんだしたので、彼らをおいて逃げてきたと言う。何か悪い感染症の発症ではないかと本当に心配した。
- (10) 彼らに与えたインパクトの一つに使い捨てライターがあった。当時、私はヘビースモーカーで、町に出た際にタバコをカートン単位で買い、使い捨てライターも大量に買って、リックの底に隠して持ってきていた。当時、高齢者の長老たちは、金属と火打ち石を使って火種をヤシの繊維に飛ばして火をつけていた。若者の中にはマッチを使うものもいた。コミュニティをまとめている社会的リーダーが私のライターを見つめていたので、お世話になっているお礼として、つつい一つあげて使い方を教えた。ライターは若者たちの羨望のまよになってしまった。
- (11) 文化人類学研究室で飲みに行ったとき、酔うと毒舌で有名であった故寺田和夫先生

- から「ボクたちは学問をしていると「専門バカ」とよく言われたが、君たち3人は「バカ専門」だね。」と言われたのがきっかけだったと記憶している。
- (12) 教室だけを急造したので、職員室はなかった。先生たちは廊下に机を並べて職務に励んでいた。「職員廊下」と呼んでいたことを覚えている。校庭は麦畑を整地したもののですぐに雑草が生えてきた。草むしり、草刈は児童の役割の一つであった。
- (13) 給料取りの子どもと商店街の子どもでは生活態度・生活習慣だけでなく言葉づかいなども異なっていた。男の子は自分のことを「オレ」というか、「ボク」というかで、その、違いがだいたいわかった。成績は概して給料取りの子どものほうが良く、スポーツやケンカでは商店街の子どもが活躍した。
- (14) 白黒テレビが家に初めてきたときの喜びは今の子どもたちにはわからないであろう。1960年頃、白黒テレビと電気洗濯機、電気冷蔵庫は三種の神器と呼ばれていた。当時、全国の普及率は、白黒テレビが約45%、電気洗濯機が約40%、電気冷蔵庫が10%前後である。電気のない冷蔵庫というのも今の子どもたちは想像ができないと思う。木箱の上段に氷を置いて冷やした。毎日、氷屋が三輪トラックで氷を積んできて、ノコギリできれいに氷を切るのを見るのが楽しみであった。
- (15) 今、思うとたわいもないことであるが、卒業式で「仰げば尊し」を歌うか歌わないかで大騒動となった。一部の生徒が、「仰げば尊し」は教師の権威主義を是認するもので、日本帝国主義の権力と統制に結び付くものだと主張したからである。結局、歌も送辞も答辞もない、生徒の主張を述べるという卒業式であったが、当時の高校生は真剣に議論をしていた。
- (16) 日本に帰ってきたばかりの頃、私の父親と久しぶりに飲もうということになって、6時に新宿で待ち合わせをした。私が10分くらい遅れていくと、父親は約束の時間にちゃんと来なかったことを怒っている。私は何で怒っているのかとっさに理解できなかった。「今日は久しぶりにいっしょに飲もうというのが目的で、6時という時間はどうでもいいではないか。会えたのだからよかったと楽しめばいいのに」と思ったものである。
- (17) マドリッド氏は町の近くの村で生まれ育ち、結婚を契機に奥さんの実家のあるマプロ村に移ってきた。プキドノンでは結婚直後はこのような妻方居住が一般的で、しばらくは妻の父親の焼畑を手伝わなければならない。ある程度年数がたつと、新しい村に移り住んだり、夫の村に移り住むこともできる。町の近くの村は、一般のキリスト教徒フィリピン人との出会いも多く、セブアノ語を話すことができ新しい知識を持つことになる。私を彼の家に寄留させたのもそのような理由からである。
- (18) マプロの人の自然環境に関する知識は豊富である。どこ森のどこで何が採集できるか、小川がどうながれ道がどうつながり、焼畑の跡地や野ブタの狩猟地などを的確に把握している。特に驚かされたのは小動物をとるためのワナである。ネズミ、山鳥、サル、野鶏を獲るために、竹と籐を切って削って組み合わせ叢などに仕掛ける。動物の微妙な接触や振動でパネ仕掛けが跳ね上がる精巧なものであった。
- (19) ネパールや日本のワークショップで次のような問題を出したことがある。「3キロのウシと5キロのウシを足すと何キロになるでしょう。学校に行ったことがある人は8キロと答えました。さて、学校に行ったことのないひとはどう答えたでしょうか。」日本の若者に聞くと、「2頭」とか「子ウシが産まれる」などの回答が多い。これはワークショップ用につくられた問題であるが、答えは「おい、お前、3キロ

なんてそんな小さなウシを見たことあるか？」である。つまり、学校の知は「抽象化」され、 $3 + 5 = 8$ を訓練されるが、ローカルな知は「具象的」であることを理解させるものである。具象的な知は、その現場では強いが、一般性に乏しいので場所が変わると理解されないことがある。学校問題は、この「抽象性」と「具象性」の議論を抜きには語れない。

- (20) 前述したが、当時の私はかなりのヘビースモーカーでタバコを隠してたくさん持って行った。集落の人々（特に若者）は、朝の挨拶がわりに尋ねてきて私のタバコを一本とって吸っていく。あるとき、かなり離れた集落に結婚式に呼ばれて一同で行くことになった。山道の途中で休んでいると多くの人がタバコをもらいに来る。現地に着くと新郎側がまだ来ていなくて2～3日待たされることになった。私のタバコが底をつく、いつも私のタバコを吸っていた若者がどこからか加工して持ってきて私に優先的に吸わせてくれた。このセフティネット的行為にますますブキドノンに滞在することに安心感をもった。
- (21) 結婚の際に、新郎の親族から新婦の親族に贈られる財物を「婚資」と呼ぶ。結婚は当事者の社会的位置を変えるので、その際に財物が動くのは世界的に見られる習慣である。ブキドノンでも新婦を幼い時に世話したと思う人は、とりあえず相手方に婚資を要求することができる。結婚を決める前に、この交渉をうまく運ぶことは社会的リーダーの重要な資質と考えられている。私の隣の家に女の子が生まれた。日本的なニックネームをつけて欲しいと言うので「サクラ」という名前をつけ、町に出たついでに粉ミルクなどを買ってきてあげた。「この子が大きくなって結婚するときは、ボクも婚資を請求できるかな」と冗談で言うと、その両親は「あたりまえのことだ」と言ってくれた。
- (22) 柳田国男は日本の祖霊・死者の特徴を「霊は留まって遠くへは行かぬ・・・顕幽二界の交通が繁く、・・・いずれか一方のみの心ざしによって、招き招かれることがさまで困難でない・・・」と述べている。（柳田：1945）2021年3月11日は東日本大震災10周年であったが、津波で家族を亡くした人が、「仕事をしていると（死んだ）親父がすぐ横にいて励ましてくれるのです」とか「（死んだ）妹がいつも私といっしょにいるのががんばらなければと思ってきました」と語っていた。このような死者に対する感覚は、祖霊信仰のない外国人に説明するのは難しい。これと私のブーサオ理解は同等と思われる。
- (23) 「なるほどザワールド」や「世界ふしぎ発見！」の取材スタッフは注文が多く、対応が大変であった。映画「植村直己物語」の撮影の時は、主演の西田敏行と食事やカジノをごいっしょしたが、話が面白くて楽しい時間を過ごすことができた。
- (24) 最上級ホテルの広間を借り切ってプレスルームをつくり、当時の海外通信の中心であったテレックスのために、衛星通信の回線を確保しなければならなかった。さらに、カトマンズ・ポカラ間は飛行機が日に2便飛んでいたが、その両方の機体を皇太子・随行員とプレスのために確保しろとの指示が外務省からきた。それでは一般のネパール人や観光客は空路をまったく使えないことになる。さらに、一団の便宜のために大使公邸の庭に各種店舗を集めてお土産屋を設置した。私はネパールに関する図書、写真集、切手の担当になった。殿下はヒマラヤの写真集をご覧になると、山々の名前や形状を本当によくご存じで、短い時間であったが山について楽しいお話をすることができた。

- (25) よく聞く話であるが、最初はアパートの契約やアルバイト探しが、顔つきや肌の色が多少異なるだけで断られることは珍しくなかった。たまたに夜に彼らのアパートに集まって（私もまじって）懇親会をすることもあったが、警察官が調べにきたことが2度もあって驚いた。近所の人から「大騒ぎをしている」と通報があったようである。この程度のおしゃべりは日本人の学生たちもよくやっていることであり、警察官が来たという話は聞いたことがない。知らない言語が飛び交っていることが、住民を不安にさせたのだと思われる。
- (26) 最初に八千代国際大学に半年留学したアルニ・バジュラチャリアとレヌ・サキヤは、ネパールに帰国後、日本語教師として後進の指導に当たって多くの日本語のできる若者を育てた。パタンに住んでいる時に隣家の小学生だったソバナ・バジュラチャリアは19歳の時に来日し、八千代国際大学に4年間私の家から通った。その後、金沢大学の大学院に進学し、日本の仏教寺院の機能について研究し博士号をとった。ネパールに帰国後は、ネパール農村の様子を日本語で書いて出版し、現在は在ネパール日本大使館の職員としてその堪能な日本語を駆使して活躍している。アルナ・サキヤはネパールに帰国後、自ら日本語学校を創り、多くのネパール人を教育している。朝日新聞社と提携するなど、若者たちの日本派遣に取り組んでいる。その他、旅行業界や観光関連産業、個人事業など幅広い分野でNEPA会の招聘で来日し勉強した人がネパールで活躍している。
- 日本においても、ジギャン・クマル・タバは八千代国際大学卒業後、横浜国立大学の博士課程に進学し、その後「かながわ国際交流財団」の職員をしながら、国際留学生協会を立ち上げ、また、ネパール要人の通訳として活躍している。サワン・ジョシは八千代国際大学卒業後、東京芸術大学の大学院音楽研究科に進学し、博士号を取得し、現在は日ネ両方を拠点として、シタールの演奏家の第一人者となっている。スロブ・プラダハンは千葉大学で建築を学び、日本の建築会社で技師として働いている。ネパール人の会をつくり、日ネ共同の映画の制作にも関与している。
- (27) 1980年代から90年代は日本で「国際協力」ブームであった。「日本で使えない・使わなくなったものでも、「途上国」の人には喜ばれる」ということで、古着や使い古しの文房具などが「善意」で集められ、海外に送付された。現地のNGOは日本から物資を送ってもらっても関税が払えない、水害被災地に大量の古着が日本から送られ現地の古着市場が崩壊した、など否定的な意見も聞かれるようになった。
- (28) エドモンド・ヒラリーは1919年生まれで1953年5月29日に世界最高峰エベレストに登頂に成功して無事に生還した最初の人である。（ヒラリーの登頂の30年前にジョージ・マロリーが登頂を目指していたが頂上付近で行方不明になった。1999年に遺体が発見されたが、彼が初登頂したかどうかはわかっていない。）ヒラリーをサポートし共に頂上についたのが、ヒマラヤの山岳地帯に居住するシェルパ族のテンジン・ノルゲイ・シェルパである。私がジュンベシで、ほんの一瞬、ヒラリーと会って挨拶をしたのは、彼が75歳の時であった。
- (29) 「サガルマータ」はネパール語でエベレストのことであり、「大空の頭」という意味である。「エベレスト」という名称は、インドの測量局長官ジョージ・エベレストから名づけられた。チベット語では「チョモランマ」（大地の母神）である。
- (30) 私が最初に勤務した八千代国際大学（現秀明大学）は1988年に開学した。以下、開学や名称変更で「〇〇国際大学」となった主な大学である。80年代から90年代に集

中している。東京国際大学(1986)、大阪国際大学(1988)、九州国際大学(1989)、吉備国際大学(1990)、神戸国際大学(1992)、つくば国際大学(1994)、鈴鹿国際大学(1994)、宮崎国際大学(1994)、東日本国際大学(1995)、鹿児島国際大学(2000)

- (31) 日本においても、政治家への評価が政治活動や政策立案能力よりも、地元で道路や橋を造ったりしたほうが大きい場合があるのと同様である。従来、村落における権威・権力の源泉としては、村長のような行政に関わる人と、宗教行事や儀礼を執行するヒンズー教の祭司を中心に回っていたが、学校の教員という新たな権威が産まれてきたことになる。学校教育の重要性が強調されると、子どもたちが学校を休んで伝統的な儀礼に参加しなくなることもある。このような絡み合ったローカルポリティクスに、私たち外国人はしばしば巻き込まれることがある。
- (32) 青年海外協力隊の村落開発普及員・コミュニティ開発隊員の技術指導は設立当時は中根千枝がその基本を確立し、その後、菊池靖(早稲田大学)、亘純吉(駒沢女子大学)と文化人類学者に引き継がれてきたことは非常に大きいと思われる。私を技術顧問に推薦してくださったのは亘先生であり、事前補完研修やフィールドワーク研修の設立も彼の構想力と尽力が大きい。私はただお手伝いをしていただけである。村落開発やコミュニティ開発の技術顧問に開発学系の教員や専門家が就任していたら、また、異なった展開になっていたと思う。
- (33) JICAの(特にアフリカの農村部の)収入向上プログラムに関して、一時は「IJP」(Income Generation Program)が脚光を浴びたことがあった。次いでOVOP(One Village One Product:一村一品運動)が日本の発の開発手法として、世界各国に導入された。同じように日本の生活改善運動がとりあげられたこともある。最近ではSHEP(Smallholder Horticulture Empowerment & Promotion:市場志向型農業振興)が広く世界に発信されている。これはケニア農業省とJICAの技術協力プロジェクトが共同して開発した手法であるが、「経済学と心理学のハイブリッド」という学問を装った謳い文句に怪しさを感じる人もいるし、「4つのステップ」という普遍的なモデル化に疑問を感じる人もいる。「売るための農業」を目的としているが、「JICAはどうして農民たちを市場経済に巻き込みたがっているのですか」という住民や青年海外協力隊の素朴な疑問に明確に答えたという話は聞いていない。
- このようにある特定の地域で特定の人々との間で成果のあげたものを、マニュアル化して拡散するという施策は、コミュニティ開発の場合ほとんど成果が得られず、一時的ブームは忘れられ、また、新しい手法に飛びついていくという現状がある。
- (34) 5~6年前から授業中にスマートフォンを平気で見る学生が増えてきた。講義を無視して動画を見たり、友達と連絡をとりあっていたりした。学生によると黙認している教員もいると聞かすが、私は講義中の私語はもとより、スマートフォンを出すことを厳禁していた。それでも習慣的についついスマートフォンを出す学生がいると、とりあげて授業の終わりに学籍番号と名前をきいて返っていた。
- (35) 私は携帯電話を長い間、持つ必要性を感じていなかった。「連絡がとれなくて困る」という苦情も周囲からあったが、私自身は困らなかった。公衆電話の数が激減し、テレホンカードの売り場がなくなり、そっちのほうに不便を感じていた。2020年2月、市役所関係の活動により古いタイプの携帯電話を持たざるを得なくなった。また、一つ面倒臭いものが身の回りに現れてきた気持ちである。

参考文献

- クリフォード、ジェームス マーカス、ジョージ (編)
1996『文化を書く』春日直樹、他訳 紀伊国屋書店
(原著 “*Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*”)
- サイド、エドワード
1986『オリエンタリズム』今沢紀子訳 平凡社、(原著 “*Orientalism*” 1978).
- チェンバース、ロバート
2011『開発調査手法の革命と再生 一貧しい人々のリアリティを求め続けて』野田直人監訳 明石書店
(原著 “*Revolutions in Development Inquiry*” 2008)
- マリノフスキー、プロニスワフ
1967『西太平洋の遠洋航海者』泉誠一、増田義郎編訳 世界の名著 (59) 中央公論社
(原著 “*Argonauts of the Western Pacific*” 1922)
- ミード、マーガレット
1976『サモアの思春期』畑中幸子、山本真鳥共訳 蒼樹書房
(原著 “*Coming of Age in Samoa*” 1928) [64]
- 飯島茂
1973『祖霊の世界 アジアの一つの見方』日本放送出版協会
- 岩田慶治
1979『カミの人類学』講談社
- 太田好信
2005『文化人類学の誘い、ふたたび』『メイキング文化人類学』世界思想社
- 清水展
2016『巻き込まれ、応答してゆく人類学 ーフィールドワークから民族誌へ、そしてその先の長い道の歩き方』『文化人類学』Vol.81-No.3
- 鈴木紀
2001『開発問題の考え方』菊地京子編『開発学を学ぶ人のために』世界思想社
- 先崎彰容
2000『共同幻想論』NHK出版
- 田村正勝
1999『国際協力の地平 ー「個」と連帯ー』『経済社会学会』21卷
- 斗鬼正一
2014『頭が良くなる文化人類学「人・社会・自分」人類最大の謎を探検する』光文社
- 友松夕香
2019『サバンナのジェンダー』明石書店
- 本多勝一
1981『ニューギニア高地人』朝日新聞社
- 中根千枝
1959『未開の顔・文明の顔』中央公論者
1978『日本人の可能性と限界』青年海外協力隊シリーズ 講談社

結 城 史 隆

原尻英樹

2006『フィールドワーク教育入門』玉川大学出版部

古川彰、結城史隆

1996「ヒマラヤ高地における環境保全システムと社会変容」『TROPICS』Vol.5
Nos.3/4

松村圭一郎

2017『うしろめたさの人類学』ミシマ社

松村圭一郎・中川理・石井美保（編）

2019『文化人類学の思考法』世界思想社

柳田国男

1945『祖先の話』『定本 柳田国男集』第十巻 筑摩書房 1962より

山本紀夫・稲村哲也編

2000『ヒマラヤの環境誌』八坂書房

飲茶

2016『史上最強の哲学入門 東洋の哲人たち』河出書房新社

結城史隆

1982「ブキドノン族のなぞなぞ遊び ～精霊がすむ森の民のユーモアとウィット」
『季刊民族学』国立民族学博物館

1984a「東南アジア農耕文化の原点を求めて ①「森の民の生活と農業」『農業協同
組合』第30巻11号

1984b「東南アジア農耕文化の原点を求めて ②「自然の神々をつくる焼畑農業」『農
業協同組合』第30巻12号

1985a「東南アジア農耕文化の原点を求めて ③「神々の恩恵を分かち合う農耕文化」
『農業協同組合』第31巻1号

1985b「東南アジア農耕文化の原点を求めて ④「共同体社会における社会秩序の維
持」『農業協同組合』第31巻2号

1985c「東南アジア農耕文化の原点を求めて ⑤「伝統的分配方法と近代文化の影響」
『農業協同組合』第31巻2号

1985d「知恵者（ダトウ）と勇者（バガニ）」『東京文化研究所紀要』第97冊 東京
大學東洋文化研究所

1999「ヒラリー・シンドロームと大衆化された「国際協力」」『経済社会学会』21巻

結城史隆・稲村哲也・古川彰

2000「変容するシェルパ社会 —外部世界との関わりの中で」『ヒマラヤの環境誌
山岳地域の自然とシェルパの世界』山本紀夫・稲村哲也（編）八坂書房

若松英輔

2021『災害を考える』NHK出版

Bista, Dor Bahadur

1991 “Fatalism and Development” Calcutta